居ない自分だけの認識だが――奉仕的に働かせて貰はう、其の上兩親の進まれない事を承知しながら高師に行つたのだからこれも罪亡ぼしの爲孝行をする必要がある。是非故郷に歸らうと思ひついた。そこで其の由を校長まで申し出た。處が奏任待遇にするから居つて呉れとか俸給を上げるから居つて呉れとかいつて留任させようとせられるのだ。達子は其の樣な慾から志を飜すのは潔しとせなかつた。「折角の御厚意だがお斷りしてどうしても歸る」といふと今度は「寄宿舍を新案するから是非留任して經營して呉れ、貴女が設計するなら設計通りのをでも建ててやる」といはれるのだ。それには一寸釣られて止まらうかと思つた。しかし後になつてそれは校長の策略で一杯食はされたのである事が判つた。

達子がやめるといへばBさん迄やめると云ひ出すのだつた。達子はBさんの退職をば切に思ひ止まらせようとした。

達「Bさん貴女はこゝを去らなくてもよいぢやございませんか。さういつてはすまないけれど、都會の大きい學校に行くと競爭ははげしいし、此の學校の樣に暢氣には勤まりませんよ。體が丈夫でないのだからもう此の土地に腰を据ゑて根を下すとしたらどうですか」

と衷心からBさんのためを思つてすゝめた。しかしBさんは例によつて眞直ぐにはとつて呉れないで、

B「さうしたら貴女の御都合はよいでせうへゝン、私を追ひ出した樣な形式にならなくてね。でもそれより厄介者の私がお先に出て行つてあげますから御安心なさい。思ひつきり翼を伸ばして御活躍なさいよ。私の後任にはね、私の母校の新卒業中で一番意地の强い何もかも一人で搔きまはす樣な人間をよこして呉れと充分賴んでやつて置きましたからね。いづれよいのが參りませうよホゝゝゝ」

と嫌味たつぷりの視線を浴せるのだ。自分では警がうてないから、二代目にはうんと打たせてやるぞといふ考らしい。どこまで僻むのだらう？すらりとした伸びやかな氣持には何故なれないのかと、いぢましい樣にもあり氣の毒な樣な氣持もした。しかし靜かに考へて見るとBさんの云ふのが穿つて居るのかも知れない。「Bさんの病氣と僻み根性とを持てあまして此の地を去るのです」と達子の心の底では强い聲で云つて居る樣にもある。生徒達の目からはBさんと達子は無二の親友の如く見られて居るし、達子の高師時代の友人な

どがたまに二人の樣子を見ると姉妹熱―同性愛―ぢやないかと疑ふのだが、全體二人は仲がよいのだらうか、惡いのだらうか、自分でも判らないなと思つた。校長は校長だけあつて奥深い達子の心の聲が聞こゑたのか一日達子を私宅によんで、

校「Bさんの方からも今度退職したいといふ申し出がありましたが、お二人が御一緒に勤められるのがお嫌なのですれば、Bさんの方にやめて貰つて貴女に御留任を願ひたいと私は思ふのですが如何でせう？　Bさんの御希望をきゝ届けてもなほ御留任は下さらないでせうか？絶對に秘密を守りますから御腹藏なく被仰つて下さい」

といはれるのだ。達子は校長がBさんと達子とを仲が惡いとにらんで居られるのが不思議な樣にもあり、又當然の樣な氣もした。Bさん自身にはどんなに思つて居るのだらうかと好奇的な心が起きて、達子は歸つて來るとBさんに聞いて見た。

達「BさんBさん一寸妙な事を聞くけれど、貴女と私とは仲が惡いのですか？それともよいのですか？貴女自身には何とお感じになつて居ます？今日は校長がBさんも退職したいと云ふが、一體二人が仲が惡くて一緒には勤まらないのか？ときかれましたよホ、、、私

ほんとに人々によつて見方が違ふから面白くてならない、全體どれが本當でせうか？」

といふとBさんは驚いた樣な顔をして眞面目になつた。

B「さう、それで大分樣子が判つた。私誤解して居た。さうでしたか」

達子には何の事やら判らなかつた。

達「何をです？」

B「私ね貴女を誤解して居た樣です。實は夏休中に前の郡視學の奥さん、それ私の姉の友人だといふ、あの方から手紙を戴いたのでしたが、それに『Bさん貴女は早く今の學校を自分から退職なさい。でないと少しの過ちでも出來たらそれを種に追ひ出されますよ』と書いてあつたのです。それで私はてつきり高野さんが校長に取り入つて、私を追ひ出す謀をして居るのだなとさう思つたのでした」

Bさんは謝りもしないけれどすまなかつたといふ顔色をした。達子もそれでBさんがやたらに達子につきかかつた譯が判つたのだつた。でも二人とも退職の意志は飜へさなかつた。すると裁縫の專任教員が「お二人がおやめになるのなら私もやめる」と云ひ出した。

丁度校長の辭職を惜んで職員が連袂辭職するかの形になつてしまつた。校長は大變得意で最後の式辭に「職員其人ヲ得一致協同シテ云々」と特にそこに力を入れて朗讀せられた。臨場せられた縣官に向つても「幸に職員のよいのが得られまして今日の發展を云々」といつて居られた。五人の職員が三人やめて裁縫教師ばかり二人殘る事になつたのだつた。

百二十一

卒業式も送別會もすんで寄宿舍の生徒は歸つてしまつた。だゝ師範の二部に入學する生徒が一人と小學校の女先生が二人と殘つて、達子とBさんとは二階に、其の人達はすぐ下の部屋に寢んで居た。待つて居た辭令も來るし、Bさんの御注文通りの後任も來た。荷物も出來た。もう明日は立たうといふ前夜の事だ。

B「もう最後だから明日一緒に立ちませう。そしてO市にまわつて私のうちに一泊して其の翌日貴女の鄕里へお歸りなさいな。ねねさうして頂戴」Bさんは達子の方に寢反りしながら媚びる樣に云ふのだ。達子は今迄ならば一も二もなくBさんの發起に循ふ事にして居たが、もうそんな必要もあるまいからと思つて、

達「有り難う存じますが、私は明後日の極く早朝こゝを立ちまして迂回せずに俥で十五里通します。明日位は私の後任も來ませうから」

と天井を見たまゝすげなく云つてのけた。Bさんは恨めしさうな、そして機嫌をでも取る樣な表情しつつ達子に近づいて來た。達子はさい前から何だか小氣味が惡かつたのだ。すつと身を引かうとすると、Bさんはもう達子の手を握つて居た。

B「最後ぢやありませんかねね、最後ぢやありませんか、今晩は一緒に寢ませう、ねね高野さん最後ですもの」

達子は驚いて逃げ出さうと思つたが、もうBさんの兩手が達子の體にかけられて居た。病身ではあつても氣が強いと同じ樣に腕力も強かつた。

達「イエそれはおよしなさい。たとひ同性だといつても一つ寢床になんか寢るのは嫌です」

達子は小なる反抗を試みたが、ドタバタ音がして下に寢て居る小學校教員に感づかれてはならないといふ遠慮があつて、思ひきつて爭つて逃げ出す事は得しなかつた。

B「そんな固苦しい事をいはないでね。もう最後ぢやありませんか、私の一生一度の御願ひです、聞いて呉れないの？ね聞いて下さらないの？」

と抱きついて來てどうにもならない。達子は今までBさんがお對の着物を作らうと云へば作り一緒にどこかへ行かういへば行きしては居たが、肉體の接觸から來る快感を貪らうとする相手の犠牲にまでなる程のお人よしではなかつた。病的のBさんも遠慮して居たか今晩までそんな大膽な振舞はしなかつたのだ。しかし何でも徹底せなければやまぬBさんの事だから最後の一夜になつて獰猛性を曝露したのだ。愛の表現だといふか知らないが、何でそれが愛だらう？人を侮辱して居る極ぢやないか。達子はもう腹が立つてたまらない。

達「貴女それは自棄ですよ。最後だからとてそんな自棄をしてどうなるものですか。神様が御覽になつて居ますよ」

小さい聲だけれど鋭く云つた。

B「私が悪いのです。罰が當るなら私が一人で受けます貴女に決して當らせはしません。どうぞそんなに云はずに私の一生一度の御願をきいて下さい、助けると思つて、ねねゆるして下さいお願ひです。どうせ女同志ですもの、どんなにも出來るのぢやありません。かうやつて抱へ付いて居る事だけ容して下さい。ねね後生ですから」

Bさんは涙をポロ〳〵こぼしながら達子を抱きしめるのだ。達子も生れてこんな侮辱は受けた事がないから口惜し涙がポロ〳〵流れた。

達「嫌ですよ上つて來たりなんかして、人を馬鹿にするにも程があります。下りて下さい放して下さい」

B「あんた一人もうよい氣持になれたものだからそんな事を云ふのでせう？もう暫くね。そんな事を云はずにね。默つて辛抱して頂戴つてば。こんなに頼むのに何故きいて呉れないの？間の着物だつて取らせて呉れたつてよいでせう？もう一生涯二度とこんな事は頼みはしないのだから、ねね高野さんよいでせう？」

Bさんの目はもうトロンとして瞳が廣がつて居さうになつて、すつかり病的になつてしまつて居る。「よい氣持になつたから」などとよく云つたものだ。此れ位腹が立つて居るのにと益々達子は腹が沸ね返つた。恩に報いるに仇を以てするとは此の事だ。何も達子が今

迄の看病を鼻にかけるのではないけれど、さんざ皮肉つた揚句こんな侮辱をさへ加へられるとは如何に忍耐を主義とする達子だつて、怒らずには居られようかと白い目でにらみつけた。それでも腹はいねない。如何に同性とは雖もBさんは強姦罪を犯して居るのだ。天はBさんを罰して呉れよと呪ひに呪つた。小さい爭鬪が夜通しつゞいた。達子はBさんの觸れた體だと思へば、自分の體ながら汚はしくて搔きむしりたかつた。達子は氣が狂ひさうな程もだゑにもだゑた。こんな人に觸れられる位なら永野さんに礫の樣に此の體を打ちつけて昔に碎いておくのだつたに、三十年といふ長い年月、自分も犯さず人にも犯させず玉の樣に大切に疵つけまいと恭やしく持つて來た此の體を、如何にあれが病氣だとはいへ不遠慮に踏み蹂つて呉れたものだ。ならぬ堪忍するが勘忍といつた所でこれが勘忍出來ようか、と達子は喰ひついてやりたい氣がした。

涙のうちに一夜があけて、ポツチリとも寢ない靑白い二人の顏を朝日は照すのだつた。達子は其のお日樣に自分を曝すのが恥かしかつた。人に會ふのはな恥かしかつた。Bさんはケロリとした顏をして起き上つて蒲團の荷造りを初めた。

B「ねゑ貴女一緒に立ちませんか?」

まだそんな事をいふのだ。達子は顏に唾を吐きかけてやりたい氣がする。でも「最後だから忍ばう、喧嘩をしないで美くしく別れよう」とむら〳〵する心を抑へ〳〵して自分も針に糸をつけてBさんの蒲團包の合せ目をまついつける手傳をした。光輝ある此の仕事よ。色即是空、空即是色と般若心經を一針一針に心の中で唱へつつ。

百二十二

達子が一切皆空と念じて居る時、下では人のバタ〳〵走る音がした。

生「先生。先生。お隣りの先生のお母さんが危篤ですと、今お國から電報が參りました」

二部へ行くといふ生徒があわてかへつて報告に來た。驚いて二人は一緒に立ち上つた。そして梯子段をかけ下りた。お隣の先生とは隣の借屋に居る裁縫專任教師の事だ。

見舞に行つて見ると「何分老年ですから心配でたまりません」と裁縫先生は搔き裂く樣に荷物をまとめたり着物を着かへたり大多忙の大混雜をやつて居た。二人は何を手傳つたら

よからうかとキョロ〳〵して居るばかりだ。

達「Bさん貴女お手傳するよりも貴女も早く歸つて出立の用意をなさいな。同じ方角に歸るのですから連れなつたらよいでせう。二部に行く子も一緒に三人でおたちなさいな」

「ではさうしませう」とBさんが寄宿舍の方に去つたかと思ふと、またさきの生徒が顏色をかへて飛んで來た。

生「高野先生。B先生が御病氣です」

達「まあ今までこゝに入らしたのに、本當ですか？」

と口では云つたが心の中を電光の如く過ぎつたものは「それは當然だ天罰だ」といふ感じだつた。「病氣になつた。いつもの持病よりははげしく來るだらう」といふ豫感だつた。「私はしつかりしなければならない。此の場合私が周章て込んで處置を間違つてはならない」といふ緊張の感じだつた。

裁縫先生の手傳はやめて大急ぎで寄宿舍に歸つて見ると、Bさんはさき程荷造をした蒲團の包の上にもたれかゝつて眞青な顏をして居た。達子が側によつて、

達「もう今日は歸るのをよしておやすみなさい」

といふとBさんは頭を左右に振るのだ。

達「そんな顏して歸れるものですか、一日だけお延ばしなさい」

と又達子が云つたが相變らずBさんは頭を振るのだつた。「それぢやそんなに大した事でもないのかしら、昨夜睡眠不足をした處へお隣りの騷ぎで驚いた拍子に腦貧血をでも起したのだらう」と推量したから、

達「それぢや何か召上つてお歸りにならなけりや」

と云つた。Bさんはやはりそれも嫌だといふ表情をした。しかし達子は臺所へ行つて生卵を一つ取つて來た。そして

達「ぢやこれなりと召し上れ。お隣の先生もうおこしらへが出來ませうから」

と云ひつゝ茶碗に割り込んだ。Bさんは氣のすゝまぬ顏をしながら茶碗を取り上げた。そしてやつと飲んでしまつたかと思ふと、カッとそこへ戻してしまつた。「オヤッ、吐血？喀血？」達子は驚いた。黃色の海の中には鮮血が交つて居たのだ。殆ど反射運動の樣に隣

まで走つて行つた。しかし樣子を話して力を借る事は無理だつた。もうお裁縫の先生は出立した後だつたから。小學校の先生はと下の部屋を見まはしても、もう出勤した後だつた。二部へ行くといふ生徒が一人誰にも連れて行つて貰へなくなつたので、心配げにオドオドして居るばかりだ。

達「もうあなた、かうなれば獨立行動をとらなけりやいけませんよ。勇氣を出して一人でお行きなさい、依賴心を起さずにね」

と先生げに云ふ事は云つたが、それは自分の事だつた。あわて返つて居る自分を勵ます聲だつた。やつと近所の店屋の子供を賴んで醫師の處へ走らせたのだつたが、醫師は來て診て「喀血の虞があるから絕對安靜をとつて胸部を冷しぬかねばいけない」と云はれるのだつた。Bさんのものは一切荷送りしてあるから取り敢へず達子の蒲團に寢させ、達子の着物を着せたのだつたが、それなりBさんは動かされない事になつてしまつたのだ。冷さうには氷がないから人を賴んで山の上の雪を取つて來させたり大騷動だ。憎らしいけれど。罰だとは思ふけれど。かうなつて見れば氣の毒な氣もするし捨てて置いて歸るわけにも行

かなかつた。父親の死と共に繼母を追ひ出したBさんは全く一人ぼつちで、兄さんが一人と姉さんが一人とある事はあつても皆遠方で一寸來て呉れるわけに行かず、たつた一人あるる叔母さんとは犬と猿との樣で、來て呉れと賴むわけにも行かなかつたから。

達子の心でよむ般若心經はそれから十五六日つづいた。

やつと、ものの言へだしたBさんは、自分の後任の所謂意地つ張りの搔き回す人に對して口を極めて達子を賞揚して紹介した。

B「ほんとに私の今迄の友達中に高野さん程の人物はありませんでした。私は度々反抗したり突きかかつたりしましたが、其の都度高野さんの德に包まれてしまひましたよ」

とそんなにいふのだつた。それは前夜の侮辱に對する罪償の詫び言葉かとも思はれたが、又それがBさんの本當の聲の樣にも響いた。やつと來て呉れたBさんの義兄さんに力を得て、Bさんの經過のよいのを幸に、人を賴んでBさんを戸板に乘せて川端まで擔ぎ出し、船でO市まで下りO市から再び戸板で宅まで送り屆けたのだつたが、Bさんは夢の中でも「ねわ上らせて下さい後生ですから」を繰り返すのだつた。義兄さんは不思議に思つて「な

んとまだ船の中にでも居ると思つて居るのでせうか、それとも土の上にでも寢て居る樣に思へるのでせうか」といつて笑つた。達子も「さうでせうよ」といつて苦笑ひをした。

百二十三

達子がBさんの介抱をやつとBさんの姉さんに渡しておいて鄕里に歸つたのは四月ももう終りにちかい頃だつた。家にはいると兩親は待ち兼ねて居た風で、双方から交る〳〵郡視學が怒つて居る事を告げるのだつた。そして歸つたら直ぐに役所に來させる樣に申しつかつて居るのだから、日暮れではあるけれど其の足ですぐ役所へ行つて來いと命ぜられた。それは二十何日も赴任が後れたからでもあるが、それよりも他に視學を怒らせる原因があつたのだ。といふのはもと〳〵達子は奉仕的に謝罪的に昔勤めて居た小學校に勤めて、自分で滿足の出來る程働いて見たいといふ考であつたのだから、前視學の時に其由をいつて代用教員で月俸も十圓内外の所でよいから暫く遊ばせて呉れと頼んで置いたのだつた。前視學は達子を充分知つて居たから「どうぞ御隨意に充分お遊び下さいハ、、、」と氣持よく承知して呉れたのだ。ところが視學が急に變つたのだつた。そこで大きな封筒に印なんかべタ〳〵捺して官僚ぶつた手紙を、達子がまだ田舍の女學校で去るだの去らないだのともぢやくつて居る頃おこしたのだつた。それには「御希望によつて多くの競爭者を排し種々の障碍を打破して貴女を入れてやるから一生懸命で働いて郡内女教員の模範になつて呉れ、月給は廿三圓出す、貴女にとつては不足だらうがこれが當小學としては力一杯だ」といふ意味が書いてあつたのだ。達子は昔から競爭して人に勝つたりする事がいやだつた。そこで其の返事として「私は他に希望者が澤山おありのに無理に割り込まうとも思はず、力一杯の俸給を戴かうとも思はないから、折角御依頼をして御手數をかけたけれど今回は就職を見合はすからどうか他の人に讓つて呉れ」といふ意味を書いて送つたのだつた。それが抑々の感情の行き違つた始めで、何度も手紙を往復すればする程二人は接近せずに遠ざかつて行き行きしたのだ。平素手土産やお歳暮やを持つて來ては頭をペコ〳〵下げて、月給の一文でも多い事を願ふ小學校の教員を扱ひつけて居る郡視學に、達子の心持が了解の出來ないのは寧ろ當然の事だつた。全體奉仕的に働くと云ふ事は、謙遜らしくて其實顔

る傲慢な事かも知れない。そこには必ず金や權威に屈服はしないぞといふ自尊心があるから。達子は知らぬ間に其自尊心の虜になつて居たのだつた。凡ての慾心を去つて虛無恬淡の積りで居たのに。それは丁度周易の夬䷪の卦から姤䷫の卦になつた樣なものだつた。一陰上に去つたかと思ふと非常に力强い一陰が下に生じて居たのだ。それを解しない觀學の扱振は自然壺が外れ〳〵するのだつた。餘程手古摺らせる女だと思つたのだらう、達子が役所に觀學を訪ふと先づそれを云ひ出した。「個人としては私は貴女に學力が及ばないが、職柄から云ふと觀學だから、どうか以後從順に私の命令を聞いて呉れ、私が貴女を得使はぬと云つては甚だ外聞が惡いから」と哀願するのか命令するのか判らない事を呉々も云つたのだつた。達子は「ハイ〳〵」と聞いて罷り出たが、もう其の時から此の學校に長く居つては却つてすまない。觀學にさへこんなに氣兼ねをさせなければならないから。自分の始めの考としては中等教員の資格がありながら小學校教員となり、しかも代用教員で月俸拾圓位を貰つて教員中の最末席に居れば、人が喜んで呉れるかと思つたのだつたが、それは全くの考へ違だつた事が判つた。やはり中等教員は中等教員仲間に身を置き、小學校教員は小學校教員仲間に身を置くのが順當の事だつた。そして人並に月給を目當てに働らく人間の方が扱ひよくて社會の人達は却つて歡迎するものだな、といふ事も合點が行つたのだつた。そこで多年の希望であつた鄕里の小學校へ再び勤めて奉仕的に働くと云ふ事は、就職と同時に諦めを共なはなければならなかつた。

でも達子はそこに思ひ出の多い事務室や圖書室や教室があるのが嬉しかつた。校長と裁縫教師一名とを殘す外の一切の人は、教師も生徒も皆昔とは變つてしまつて居た。永野さんも勿論他校に轉じて居られた。しかし住居はやはり昔の所に昔のままであつた。

達子は久しぶりに其の門前を通つた。何やら恐ろしい樣な嬉しい樣な氣持で塀の上に聳にて居る松をながめたり、門の中をそつと覗いたりした。門の中はかなり廣い中庭だが、そこには庭一面といつてもよい程雛菊が植ゑられて可愛い花を咲かせて居た。「オ、雛菊が！雛菊が！あんなに澤山！」達子の胸は躍つた。「あれは十二年も前に小田卷草に添へて達子が一株此の門内に運んだ花だ。それが殖ゑたのが悅しいのでなくて殖やして下すつた永野先生の心根が悅ばしくてならない。それぢや先生も達子をまんざら路傍の人とも思ひ

捨てゝは被居らないのだらうか」と思つたが「イヤイヤそれは自惚々々。あれは偶然の出來事」と思ひなほして二三間行き過ぎると、「アッあの足音は！昔に變らない足音だな」と思はれる足音が永野さんの中庭に聞ねて、バタ〳〵と門まで出てそこで止つた。達子の背には人の視線が焦げつく程注がれて居るのを感じた。でも達子は一度も振り返つて見ようとはしなかつた。そこらには四五人の女の子の群が居た。達子はそれを見るのがまた恐ろしい樣な氣がした。それでも吸ひつけられる樣に其の方に歩んだ。髪の毛の赤い顏色の白い痩せぎすな八つ許の女の兒が物おぢした樣に達子の方を見た。二重瞼の大きい其目！其目は嘗て盛裝して達子の家に挨拶に來た花嫁が、達子の胸に消ね難い燒印として捺して行つた其の目だ。永野さんの奥さんの目だ。も一人の兒、それは顏色も黑いが髪も房々と黑いよく肥ねた子、それが懐つこい目でじつと達子を見送つた。其目は圖書室の戸棚にもたれて、物案じしながら達子を見て居た水上さんの目だつた。「同じ名の二人が遊んで居るのだな」と曉つた。達子が抱き上げて見たいと思つたのは色の黑い子の方だつた。達子は家に歸るとすぐ裏庭に出て小田卷草を見に行つた。二三輪昔のままの色に咲いて居た。小一時間もそこに佇んで、達子はぼんやりと其花をながめたのだつた。

百二十四

達子の家のすぐ前に小學校教師の家がある。夏の土用が去つて風に秋らしい氣分を帶びて來た頃其の家に不幸があつた。達子の家からは兩親とも行つて勤められねばならなかつたので達子一人が留守番をして居たが、出棺前になると達子の心は落ちつかなくなつて小窓から外ばかり覗いて見た。それは必らず永野さんが送葬せられる筈だと思つたからだ。橘の紋所の羽織を着た肩幅の廣い人の後姿を見出した時には、何とも云へない喜と悲との感じで胸が一杯になつて、達子は誰に氣兼ねもなく涙の溢れたけ溢れさせて、籔蔭に隱れるまで伸び上り見送つたが、其影が見ねなくなると急に大變な惡い事でも犯した樣な氣がして來た。「こんな弱い筈ではなかつたのに、郷里に歸るべくまだ修養が足らなかつた」とつくづく思つた。そしてすぐに鍵を取り出して倉の二階に上つた。簞笥の小抽出の奥深くしまひ込んであつた永野さんの手紙や葉書や寫眞や、達子がそつと拾つて大切にしまつて

置いた永野さんの書畫の反古や、そんなものを一切持ち出して風呂の下の灰にしてしまはうと思つたのだ。もうこれが見納めだと一々讀んだり眺めたりして居ると次第に燒く氣がしなくなつて來る。こんな事でどうなるかと元氣を出して葉書を一枚投げ込むと、何の雜作もなく赤い火がチョロ〳〵〳〵ッと通り過ぎると、黑い灰が葉書の形のままに殘つてやがて白くなつてホロリ〳〵と崩れてしまふ。達子は其の臭氣を心ゆく程吸ひ込んだ。又くべた。又燒けた。葉書は皆灰になつた。手紙は封筒だけ先に投げ込んだ。今度は中味を燒く番になつたが、それはいかに勇氣を出しても燒く氣がしなくなつた。片端から細く引きさいては紙捻をし始めた。指の先が痛くなる程捻りに捻つた。こんどは二本合せては觀世縒をした。とうとうそれは火にくべないで美しく卷いた。最後に寫眞が殘つた。思ひきつてメリ〳〵と臺紙から引き離して破つてしまつた。團子に丸めて風呂の火をめがけて戰きながら投げようとしたが、其の手は我知らず自分の口に向つて突進した。寫眞は火の中でなくて口の中に投げ込まれたのだつた。達子はそれをいつまでもニチャ〳〵噛んだ。呑み下さうか？呑み下さうか？と幾度も咽喉元まで送つたが、また出した。イヤ〳〵それはいけない達子の血や肉に交つてしまつたら、嬉しい事は嬉しいが、しかしもう取り返しはつかない。どうしてそれが純潔な肉體と云へようか。姦淫したと同じ道理に陷ればしないだらうか？神樣に恥かしい。吐き出さうか！でも惜しい。イヤそれでも呑んではいけない。出せ出せ。とう〳〵吐き出した。でも火の中に投げるのは惜しくて紙捻と一緒に其のニチャを再び箱の中にしまつたのだつた。思ひ出の種も一切綺麗に捨ててしまひ、自分の心も美しく拭はうと思ひついた企ては、とう〳〵こんな結果になつて不成功に終つてしまつたのだつた。

しかし其の頃から達子の心は多少ゆらめきかけたのだつた。老い行く二人の親が毎日の樣に「お前が緣づかずに居ると死んでも死にきれない。どうぞ緣づく氣になつてお呉れ」と涙をこぼす樣に云はれるのに、達子がそれでも强いていやと云はうものなら、お母さんなどは氣でも狂ひはしないかと思はれる程なのだ。達子はそれが氣の毒ですまなくて、「あんなに云はれるのだから何處へでも誰にでも入るといふ人間に此の持てあました肉體を遣つてしまはうか」といふ氣にもなつたりした。「しかしもう人を愛する事は出來ない。だ

から初縁の人にやるのは先方が可愛さうだ。先方の人も一度妻を失つたり失戀したり事のある人ならお互樣だから罪作りでもないだらう。そんな人の所へ行つて主婦事務取扱といふ職業をするのなら或は出來ない事もないかも知れない」などとも考へた。そんな考から先方が初縁ときけば如何に良縁でも、良縁ならば良縁である程斷り〳〵して再婚の人を候補者に殘して見、そして先方に哀れな條件があればある程達子は心を多く動かす樣になつた。それでもなほ遊戯的な婿選みで、本氣に自分が嫁に行くのだとは思へなかつた。だから先方が急いだりすれば一も二もなく斷つてしまつたのだつた。達子は其の樣なことをする度に大姉さんから中姉さん、それから小姉さん大兄さんの緣談について考へた。そして「何といふ自分は我儘な振舞をする人間だらう」とつく〳〵自分ながらあきれもしたり、又それが非常な幸福である事を感謝もした。そして此の樣に自由に振舞はれるのは職業教育を受けたお蔭だと何だか誇らしい氣もした。其のくせ同じ窓で若しくは姉妹學校の窓で同じ樣に教育を受けて社會へ出て働いて來た人の上を、次から次と思つて見ると脊に冷水をかけられる樣にもあつた。三十二三になつて繼子が三人五人七八人とある所へ嫁いで苦勞する人、それはまだよい方だつた。同僚の男教員と浮名を流す人、それがかなり大勢あつた。同性愛で心中したといふひどいのも出て來た。Bさんの醜態はなま〳〵して目擊した所だつた。他人事ではない。あの樣な心理狀態にならねばならぬ番手が、今にも達子に襲來しさうに思はれる。女の厄年三十二三、其れは十八九歳よりももつと過ぎにくい關所の樣に思はれるが、其の眞黑の關所が目の前にあるのだ。自分は其の關所にさしかからない前に身を處置してしまはなければならないといふ氣もする。所が月日はグングン達子をつれて關所に向つて進んで行くのだつた。とう〳〵其の年も暮れてしまつて達子は三十一になつた。乏しなさが增した。

其の正月鄕里に近い私立女學校から招かれたので、達子は折角自分から頼んでまで這入つた小學校ではあつたけれど、思ひきつて退職して、其の女學校に轉じたのだつた。でも家から學校まで二里餘しかないので、土曜日曜かけて歸省する事が出來るのがせめてもの樂みで、達子は其日の來るのを待ち兼ねて必ず歸つた。大雨だらうが大風だらうが、そんな事は眼中にない。歸る嬉しさで生き得たのだ。

百二十五

梅雨の季節は嫌だけれど、くちなしの花が咲くのが達子は好きだ。隙さへあれば窓にもたれてぼんやりと其花を眺めて、甘い香に浸つて居る、其の間は實に達子にとつては一刻千金の値があるのだつた。

五月十七日、其の日も雨だつた。達子は五時間目があいて居たので、また例によつて窓の方にふらりと行きかけた。「あ、どこかの修學旅行隊が來たな、こんなに雨が降つて居るのに」達子はぬれびしよになつた小學校生徒が門内にはいつて來るのを見ると踵をかへして自分の椅子に戻つて來た。冥想すべく環境がざわめき過ぎる樣だつたから。そして戻る序に持つて來た新聞を机の上一杯に廣げた。でも何だか旅行隊の事が氣になつた。「今は達子の他に誰も手があいて居ない、接待しなければならないだらうか？でも校長が被居るから」などと考へつつ腰を浮かさうともしなかつた。私立學校で書記といふ樣な人も居らず、平民的な校長は何でも御自身にして下さるのだ。隨つて郡視學の下で小學校教師として働いた時の樣ないやさは少しもなく、まるで父の前の娘の樣な氣持で居られるのだつた。案の定校長が自分で玄關に出て其の旅行隊を迎へられた。「まあよかつた」といふ樣なずるい氣もして又新聞の上に目を注ぐと「高野さん、一寸」と校長が呼ばれた。「やつぱり私が行かなければいけないかな」と新聞を投げて置いて走つて出た。驚いた。まあ。驚いた。其の旅行隊の引率教師は？ほんとにまあ、永野先生なのだもの。しかし自分ながら不思議な程落ちついた態度になれた。

達「オヤ、被入いませ。まあ降りまして御難儀でございましたね」

と笑顔をして靜かに云つた。そして卑怯らしく伏目にもならず、正面から永野さんを見る事が出來た。永野さんは昔よりは痩せて、鬚達磨の樣に黒々とぢぢむさく毛を伸ばして目ばかりバチつかせて居た。聲だけは十年前と少しも變らないで、

永「ヤア暫くでした。御機嫌よろしうございましたか。今日は御邪魔に上りまして」

と鬚の中から白い齒を見せて莞爾と笑はれた。これも永野さんとしては上出來の挨拶だつた。達子は校長の顔を見たが何等不審を抱いたらしい氣色もなくて、

校「高野さん、あちらに行つて足を洗はせて上げる樣準備をして下さい」

とやさしくいはれた。元來氣のきかない達子が今日は一層ぼんやりして居たのだつた。校長に云はれて始めて「ほんにさうだつた」と氣がついて井戸の方に飛んで行つた。落ちつかう〳〵とは思つて居ても流石に逆上せずには居られない。飛んで來るのは來たが「何からどうしよう」とたゞそこらをうろ〳〵見まはして立つて居た。後からついて來た校長が「盥を」といはれた。「ほんにさうだつた」と盥を探せば盥が見つからない。炊事場に行つてバケツを持つて來ると校長が「それは炊事用のバケツですよ」といはれる。何だか叱られた樣な氣がして「ハッ」と云つて又炊事場にかけ込んでバケツを元の所におくとガチャリと大きな音がした。でも仕方がないもう音はしてしまつたのだから。また井戸端の方へ行きかけた。校長がもう盥を見つけてをられた。お雜巾は幸そこらにあつた。達子は水を汲んでやる事を忘れて居た。盥をさがす事ばかりにあわてかへつて居て。やつと手動ポンプを動かし始めた。生徒は續々足を洗ひに來た。永野さんも來られた。生徒が下駄をぬいで上に上るのを監督する樣にそこにぢつと立つて居られる事は居られるが、目は達子に注がれて居ると達子は感じた。しかし達子は側目もふらず手動ポンプを動かして居た。

「鬚むしやになつて痩せた永野さん、あれは十年前の永野さんの幽靈ぢやなからうか」とふとそんな事が心に浮んで來た。さう云へば自分も幽靈だ。二つの幽靈の會見だなと思はれるのだつた。

足洗ひのすんだ生徒を達子は作法室に案内した。達子は自分がお茶をくんだり話相手になつたりせなければならない場合だといふ事はよく知つて居た。もし永野さんでない人が引率して來たのだつたら大いに奔走して接待したであらうが、どうしても永野さんと面と向つて話をする事は達子には出來ない仕事だつた。そこで作法室に生徒等の皆がまだ入りしまはぬうちに、サッサと事務室に歸つて讀みかけの新聞に目を注いだ。一段位文字にそつて目は動いたが何が書いてあつたか一つも頭には這入らない。又始めから讀みかへして見たがやつぱり判らない。何か知ら作法室の方が氣になるのでそつと樣子を見に行くと、小使がお茶を出して居る樣だつたので、「まあよかつた」と再び事務室へ歸つて來た。でも腰は椅子に落着かない。接待に行かぬのも惡いし行くのも恐ろしい樣なし。新聞をバサバ

サあちらの頁を出したりこちらの頁を廣げたりして、とう〳〵疊んでしまつた。それを窓際の小卓の上に返して來ると、今度は國語の教科書を棚から引き出した。六時間目の始まりの鐘が早く鳴つて呉れゝばよいにと時計を見るとまだ二十分もある。こんなに時間があるのに接待に行かないと永野先生が何と思はれるだらうか？達子が戀をして居て失戀したのだといふ事を感づかないで居られるのだつたらきつと「昔は習字もなほしてやつたり睦じくして居た同僚だつたのに恩知らずの奴だ、接待や案内の勞位自分でとつたらよいに、去る者は日々に疎しの例に漏れぬ輕薄な奴だな」とお思ひになるにきまつて居る。萬一失戀した事を感付いて居られるのだつたら「やつぱり怒つて居るのかな」と氣持惡く思はれるだらう。どちらに思はれるのもつらい。でもどんな顔をして作法室へはいつて、どんな話をしよう？まあ行くまい。

下調も出來て居ない教科書を開けたり閉ぢたりしながら、立つて見たり腰をかけて見たりして居るうちに時計の長針は回つた。ヂャン〳〵「それ鳴つた」とすぐに二階の教室に駈け上つた。逃げ場所を見出した樣に。

百二十六

達子は教室のドアーをしめるとホット安心した樣な氣がした。でも追手が來さうな不安さがチョイ〳〵入口の方に目を向けさせるのだつた。參觀に來られたらどうしよう？大分修養はして來たつもりだが、それでも青くなつたり赤くなつたりして、立ちん坊になつたり吃りになつたりしたら大變だ。足音がしはしないかと一時間中ビク〳〵して居たが、とうとう誰も來ず、不出來ながら教授は終つた。鈴と共に一同禮をして達子は教壇を下りた。そして廊下に出るとバッタリ出會つた。校長が案内して居られた。達子は摺れ違ひざま一寸會釋して逃げる樣に又事務室にかけ込んだ。そして又立つたり据つたりを始めたのだつた。自分もついて廻らないと工合が惡い樣な氣がするし、ついて廻るのも亦工合が惡い樣な氣がするし。しかし今度の其間は大變短かかつた。「アラもう歸るのか」と思はれる程早く見終つてずん〳〵出て來て、門の所で生徒は集つて居た。永野先生は疳癪聲を出して「早く並ばないか。側面二列縱隊だ」と云はれた。達子はビクッとした。何だか「何故接

待して呉れなかつた」と自分に云はれた様な氣がした。走り出てお辭儀をした。

達「どうも失禮致しました。時間がございましたものですから」

と苦しい言ひわけをしつつもにつこり笑つた。

永「御邪魔を致しました」

永野さんの聲は搾り出した苦しい響の様に思はれた。そしてすぐ生徒の方にむいて再び、

永「早く並ばんか。急いで歸るのだぞッ。こゝから前半分石段を下りよッ」と云はれた。

校長が「一寸寄宿舍の方に御案内をしますから」と云つて居られるのも永野さんの耳には入らぬらしい。達子は淋しい悲しい氣がして、自分の視線を足下に落して下駄の爪先に泥のついたのをぢつと見た。紅葉山に背て行つた時も丁度こんな氣がした。男生徒をつれた永野さんが急いで歸られるのを、達子は神岡さんと二人で見送つたのだつたが、あの町角をまがられて姿の見えなくなつた時どんなに淋しかつたらう？自分の不愛想にした事をどんなに心で詫びたらう？二人の個性は幾度出會つても同じ氣拙づさを作り出す様に出來て居るのかも知れない。などと心で考へた。

永野さんがやつと方向をかへて寄宿舍の方に向はれたから達子も「そこまで私もお伴を致しませう」といつてついて行つた。二列縱隊を中にはさみ、前後の距離も二間ほどおいておづ〳〵と達子は永野さんの後に歩んだのだつた。校長は親切に「これが最初の建築で、あの棟が何年の建築で」などと説明せられるが、しかし永野先生の耳には恐らく入らないだらうと達子は想像した。もう寄宿舍を出ようとする門の手前に創立者の記念碑がある。校長はそれをも指さして説明せられた。さすがに急ぎ足の永野先生も其の前に立ち止つて碑文に目を注がれた。雨も小晴れになつて、碑のあたりの木や石のたゝずまひに一段の見榮えがしたが、それも永野先生の目に映つたかどうだつたか。達子は碑のわきに立つて露に撓んだ柘榴の枝をいぢくつて居た。永野さんの視野の中に自分は今居るのだなと感じつつ。さうするとわけもなく嬉しい樣な、小娘になつた樣な、しかも此の露は私の涙だといふ樣な感傷的な氣分もするのだつた。

永野さんはやがて校長に挨拶をし、達子の方にむいても、さつきとは多少やわらいだ調子で、

永「どうも有難うございました。どうぞもうおかまひ下さいますな」と見送る事を辭退せられるのだつた。達子は「ハイまあちよいとそこまで」といつて永野さんの後から門を出た。もう大分度胸が据つて居た。「どうも今日はお天氣が惡くていけませんでしたね」などと自分から物を言ひかけたりする事が出來た。今度は永野さんの方が受身の形で簡單にたゞ「ハイ」と答へられた。「もうすぐお歸りですか？それともどこか御覽になりますか」と達子がまた追擊の形でいつた。「イエ時間がございませんからすぐ歸ります」永野先生はさう答へられたが、足はそれでもゆつくり運ばれて居た。達子は「左樣でございませうねね、もう三時をすぎて居ますから」と懷中時計を出して見たりした。午後の授業が二時間すんだのだから三時のすぎて居る事はきまつて居た。すべて沈默の苦痛を破る爲の會話や所作にすぎなかつたのだ。そんなにして二丁程歩いた。そこから道は左に折れるのだ。こんどは永野さんの方から「もうどうぞ」と會釋せられた。達子が「それぢやこゝでお別れ致します。どうぞ御機嫌よろしくおそろ〳〵お歸りあそばせ」と立ちとまつてお辭儀をした。「さようなら」と生徒にも愛嬌を撒いた。永野さんは「ぢや、左樣なら」と一寸帽子を取つて頭を下げて、すぐ生徒の方にむいて「コラッ、先生が早く歩き出したらお前等もついて早く歩くんだぞ」といはれた。さつきの「早く並ばんか」と云はれた時程怒氣は含んで居なかつたが、それでも後を見ずさつさと足を早められた。雨はまたバラ〳〵落ち出した。達子はそれでも引き返さうともせず見ねなくなるまで後影を見送つた。そしてやれ〳〵と安心した樣な氣と、大切な事を云ひ落した樣な氣とがごつちやになるのだつた。

百二十七

達子が永野さんを見送つておいて再び事務室に歸つて來た時には、もう敎員達はみんな自分の宅に歸つてしまつたと見ねて誰もそこには居なかつた。達子はどつかりと自分の椅子に腰を下した。しかし殘務を處理する氣にも明日の準備をする氣にもなれなかつた。頰杖をついてたゞぢつとして居ると、夢の樣な今日の出來事が順々と目の前に浮いて來ては執拗く繰り返されるのだつた。さうかと思ふと十年前の事や十一年前の事や十二年前の事まで出て來た。湯の樣な涙がポタ〳〵机に落ちた。後には大聲をあげて足る程泣いて見たい

樣な、この事務室中のものをこつぱに碎いて躍り狂つて見たい樣な氣がし出した。机の上に突つ伏して泣いて見たがまだ泣き足らないで、椅子から崩れる樣に辷り下りて座板の上に座つて椅子の蒲團に顏を埋めて泣いた。後には座板の上に轉がる樣にして正體ない程悶へて泣いた。暫くしてふと自分のして居る事に氣がついた達子は顏をもたげて座り直して涙を拭つた。「何故泣いのだ？何が悲しいのだ？意氣地無し、生れ代つた筈ぢやなかつたか？一度も二度も三度も死んだのぢやなかつたか？無ぢやないか？一切空ぢやないか？」わく〳〵する頭を涙にぬれた手巾でしつかり括つて靜座をし始めた。足の拇指を重ね合して其上にどつかりお尻を据ゑて頭の頂から尾骨まで眞直にして、目をつぶつて深く下腹まで息を吸ひ込んで舌を短くして門齒から離し、眉と眉との間を開く樣な氣持にして無の世界を觀じようと努めたのだ。滿室の蒼蠅ではないが拂へども去り難い煩惱は、中々それ位の未練な達子の靜座で拂ひをほせられようか？またしても又しても搔き亂しに來るのだ。「今度こそは無念無想」と思つてる下から「ああ今頃はどこらを歸つて被居るだらう？雨が降つて難儀をしては被居らないだらうか？どんな事を考へ考へ歩いて居られるだらう？

『高野つてやつぱり灰色の女だ、全體白なのだらうか黑なのだらうか？要するに今日の旅行は不愉快を味ははされに雨を犯して行つた樣なものだつた。馬鹿々々しい』これが永野さんの道々の考へ〴〵さではあるまいか？」などと思はれるのだつた。「あーあ生ぢつか靜坐なんかしたつて駄目々々それよりも心機一轉作文の添削でもしよう」と立ち上つて椅子に腰をかけて朱硯を出した。ガラッと其の時戸があいて「もうおしまひなさい」と校長が這入つて來られた。達子は周章てて鉢卷をとつた。「よござんすよ」と校長は莞爾せられた。「ホ、、、」ときまり惡さと泣き顏を見られまいとの爲に達子は机に伏さつて笑つた。

校「今日來た永野といふ人は何處の人ですか？」

校長は何の氣なしに云はれたのだつたらうが、達子は胸を刺されたかと思ふ程ギョッとした。

達「此の土地の人ですが、もう十幾年もあちらに行つて居られるのでございます」と目をマヂ〳〵させながらさういつた。

校「中學出ですか？」

達「ハイ」

何だか自分の身許調べをでもせられる樣な氣がする。

校「軍人上りと見ねますね。側面二列何とか云ひましたね、五六年の小さい生徒に」

達「ハイ一年志願をしたのでございますホ、、、」

校「文檢でも取ればよいのに奮發してねね」

達「あの方は一寸變人でございますから、習字なんかはすぐにとれさうな程上手ですのに取らないのでございます。歷史だつて中々よく調べて居て詳しいのでございますが……

…大方資格をとるなどといふ事が頭から嫌なのでございませうよホ、、、」

達子はさうは云つたものの心の中で、「實は私が原因してあの樣に變人にしたのでは無からうか？隱者の樣に魚釣と碁打ちとばかりして居る人に」と思つた。そして此上校長から永野さんの事を尋ねられるのが恐ろしい樣な氣がしたので、そこ〳〵に荷物を片付けて一禮して事務室を出た。そして下宿に歸る道々もなほ考へるのだつた。

「私は全體よい人間だらうか惡い人間だらうか？強い人間だらうか弱い人間だらうか？今日まで品行上さして噂も立てられず、行く處良生徒良敎師として待遇せられて來たがそれでよいのだらうか？眞に此の樣な人間がよい人間なのだらうか？社會を欺き自己を欺く大惡人ではあるまいか？人の褒貶を恐れる最も弱い人間ではあるまいか？考へれば考へる程わけが判らなくなつて來る。でも待てよ。其の疑を生じるのが自分の未熟さ不誠一さではあるまいか？志の立て方が確乎として居ない證據ではあるまいか？絶對的の人間の價値を穫得しようと思つたのではなかつたか。それは即ち聖人にならうといふ事ではないか。もう一度考へ直さう。一體善とは何だ？惡とは何だ？『天理もと善惡なし、動いて氣となり陰陽生じ萬物消長するに至つて始めて善惡生ず』と傳習錄か何かで見た樣だ。『物あれば則あり』で物が生じて始めて他物との交渉が出來、他物の間に介在する其の介在の仕方に當不當が生じ、冠は頭と親善し靴は足と親善する。一寸化學の模造式的のものではないかと思はれる。そして其の適當それが即ち所謂善其のものでなくてはならぬが、全體如何なるを當とするかといふに、宇宙の二大作用である陰と陽即ち動と靜、言を換へれば際限なく變化しようとする傾と微塵も漏さず大統一の下に整理しようとする傾。一つが遠心力な

ら一つは求心力だ。其の調和を意味するのではなからうか？　例へば人にあつての遠心力の現れは個性の擴充發展を欲する私利私慾より事業慾・藝術慾・向上心等もそれで、求心力の現れは廓然大公を欲する良心を始め、道德愛好心・信仰渇望心等がそれではなからうか？そしてこの二面の心がうまく合致して一方に偏しない所が中庸で、大學に所謂『至善に止まるにあり』の至善もそれではなからうか？所謂仁とはこの天理の流行をよく飲み込んで、その仕事に參する道で、義とは此の變化しようとする力と統一しようとする力とに矛盾を來しさうな時に、よい程な所で折合をつける、それを云ふのではあるまいか？達子が今其の仁義を行ふ事に自ら慊つて主一になれて居れば疑が起る筈はないのだつた」

達子の足は知らない間に下宿して居る家の門まで歸つて居た。

百二十八

達子は下宿に歸つても、其家のをばさんに物を云ふのも忘れ、袴を脱ぐのも忘れて座敷に上り机の前につくねんとして考へ込むのだつた。

「自分がもしあの時假に戀を語つたとしたら今頃どうなつて居るだらう？　或は二人で樂しい家庭を作つて、いつぞや見たあの女の子は自分の生んだ子で、個人としては擴充した生活をして居るかも知れない。しかし親兄弟からは少くなくとも勘當を受けてをり、友人や知己からは丁度I先生と赤澤さんとの樣に爪彈きさせられて居るに違ひない。自分はそれをかまはぬとしても、親や兄姉に苦痛を感じさせ、友人や知己に不快な思ひをさせたといふ事は仁的の行爲ではない。高野家及其の親族といふ一つの統一から反逆した事になるのだから義でもない。不仁不義は惡だ。自分だつてそれを思つた時には心のどこかに空虛が出來て擴充した感じにはなれまいと思ふ。田舍の女學校で大日靈貴神になつた樣な氣持で活動した、あんな氣持は眞似程も味はへなかつた事だらうと思はれる。あれは個性の擴充と宇宙の統一とが寸分の隙なく合致した場合の快感だつたのだらう。して見るとやつぱり達子の通つて來た道の儘でよささうだ。いつかお父さんが大義名分を出發點とした幸福でなくては眞の幸福でないといはれたがそこだな。しかし待てよ。達子の今までの行動によつて誰も迷惑して居るものはないだらうか？永野さんは？解けない謎に苦しんでは居られ

ないだらうか？戀を語つたりして達子が所有物にしてしまはうとするよりも默つて自由の天地にそつと置いてあげて氣に入つた女を勝手に選ばせる、その方が戀よりも大きい愛だと思つたのだつたが、それでよかつたらうか？今までずつと幸福に暮して來られただらうか？あの遊んで居た女の子のおづ〳〵と物恐ちした樣な不安げな顏、あれが永野さんの心ではなかつたらうか？さうだとすると達子は却つてすまない事をした罪深いことになる。あの女の子の顏と今日の永野さんの雨中旅行と引き離して考へる事は達子には出來ない。こんなにいつまでも達子が獨身で居れば居る程永野さんの心に不安さを增しはしないだらうか？不安の極思ひついて達子の樣子を見にいらしたと、どうも其の樣に達子には受けとれる。思ひきつて誰かと結婚してしまつてあげようか、そしたら却つて安心せられるかも知れない。親も安心する。すべてが圓滿に解決がつくだらう。達子自身にとつては自殺も同じだが、どうせ何度も死んだ人間だ。親が喜び愛人が安心して呉れるなら行つたつてよい。しかし貰ふ人が今度は迷惑する事になる。うつ蟬のもぬけの殼を進呈したつて誰が悅ぶものか。それこそ人を僞るのだ。まあ考へものだ。その行く行かぬの問題はさておき、永野さんの今日見わたのが達子の想像通りだとすると達子は捨てゝおかれない。聞きたがつて居られることをきかせてあげて安心させねばならぬ。書かう。一切書いて總勘定しよう。そしたら二人とも蘇へれるかも知れない。新天地がそこに見つかるかも知れない」

そこまで思つて來ると硯箱の蓋をとつて墨を磨り始めた。卷紙を出した。どんな風に書かうか？　感傷的にならない樣にあつさりと書かねばならないが、候文にしようか？　まあよい。達子は筆に墨を含ませながらざつと腹案を立てた。

拜啓今日は雨中をおかまひなく御遠路をわざ〳〵お越し下さいましたのに學校の方では行き届いたお取りもちも致しませず、殊に私は勝手ばかり致しまして大變失禮致しました。中途御無事でお歸りになりましたか。さぞかしお疲れになつたでございませう。生徒達も疲れた事と存じます。

扨て十年ぶりにお目にかかつたのでございますが、少し昔よりはお痩せになつた樣にお見受け致しました。お髮の伸びて居たせいでもございましたらうか？どこかお加減がお惡いのでもございますまいね。實は私は高師を卒業致しました時に一寸御挨拶に上りた

いと存じましたのでしたが、得上らないでしまひました。それから昨春郷里の小學校に奉職致します樣になりましてからも上ればよいにと存じつゝお門も通つた事がございますのに何だかお闘が高い樣で得上りませんでしたのでございます。今日お出で下さいました時にも何だかお恥かしい樣な氣が致しましてお前に出て積るお話を致します勇氣も出ませず逃げまはる樣な振舞ばかり致しました。きつと先生は不愉快に思しめして薄情な恩知らず者とお怒りになつた事と存じます。さう私も推察しながらあんなにしか出來なかつたのでございます。つまり憶病なのでございます許して下さいませ。ほんとに失禮ばかり重ねまして相すまない次第でございます。しかし決して御恩は忘れては居りませぬ筆を持つて字をかく度に御厄介になりました昔の事を思ひ出して居ります。ほんとにあの時先生がいらつしやいませんでしたら附設女學校の生徒の習字をなほすのにどんなにか苦心したでございませう。又私自身にも今日位の文字も書けなかつたでございませう。それほどの御恩をうけながら一言の御禮も御挨拶も得申し上げないのでございます。先生私が何故此の樣に憶病なかは御推察下すつて被居るでございませうか？私が申し上げなければお判りにならないでございませうか」

達子はこゝまでは書いたがここでぱつたり行きつまつた。筆を何度硯になすりつけても次の文句が出なくなつた。下宿のをばさんが、

「まあいつの間にお歸りになつたのです？御飯はもうさつきから出來て居ます。なぜ今日は遲いのかと心配して居りました。お手紙も來て居りますよ」と間の襖をあけて顔を出した。食卓の上に置かれた手紙は珍らしくYさんからだつた。

百二十九

達子は夕食はたべる事はたべたが何をたべたのか味は一切判らなかつた。珍らしく來たYさんからの手紙も見ようともしなかつた。たゞあの次の文句をどう書かうか、永野さんが達子の心を推察して居られるならくどくしく書かない方がよいし、書くとしてもどんなに書かうか。三十一になつて始めて戀を語るのだが、語らうと思へばさすがに胸が轟く樣に思はれるのだつた。「書いつちまへ短刀直入だ」と、再び筆をとり上げたのは考へて考

へぬいた後の事だつた。

「多分御推察は下すつてると思ひますが、もう何もかも赤裸々に申し上げます。私は日々御厄介になつて有り難いと思つて居た謝恩の情と先生を崇拜する情とがとう〳〵知らない間に戀になつて居たのでございます。そしてこんな心持が戀といふものだらうと自分に知れ出した頃から私は憶病になり初めました。冷靜を裝ひ初めました。何だか自己をも僞り貴郎をも僞り世の人をも瞞着した樣な氣も致しますが、やはりそれが私の個性だつたのでございます。所が突然貴郎は御結婚なさいました。私は其の時自殺しようかと思ふ程失戀致しました。しかし微塵も貴郎を恨まなかつた事は神々も照覽して居て下さいます。私は何も貴郎と約束した事があるのでもなく勝手に一人で戀をして一人で失戀したのでございますもの恨む理由がございません。ただ悲しんだのです。そして其の時は色々と貴郎の御心を推察して見ました。それはお母さんのないといふ御家庭の事情から早くお貰ひになつたといふ事が一番間違のない推察だとは思ひましたが、それでも奥樣が美人だといふ噂をきいますと美人がお氣に召してお貰ひになつたのかとも思つて嫉妬心も起きて見たり、又私が戀してると御感づきになつて、それは到底ならぬ戀だから早く諦めさせたがよいといふ思し召しからだと思つて見ますと戀以上の愛だと感謝せられますし。最初から私が戀をして居ることをお感づきになつていらしたのに急に冷かげになつたのでお怒りになつて多少自棄氣味で御結婚なすつのではないかとも思へばすまない事をしたと思はれますしそれは色々と考へました。今日お出で下すつたのにつきましても私は偶然の出來事とも考へますが、又何だか私の戀に關係ありさうにも思はれます。失戀後の私がどんなに暮して居るか怒つて居るか泣いて居るか諦めて居るか、そんな事を見にいらしたのではございませぬか？でなければずつとずつと前の戀と覺らぬ前の美しく樂しく潔かつた時の交際を復活させようといふお企てかではございませんでしたか。何はともあれ私は自分でそんなにきめ込んで大變有り難く存じました。もう〳〵失戀の悲しみなどは疾くの昔に捨てゝしまつて今ではすつかり成佛して居るつもりでございますが、それでもどこかに一寸でも悲しみの影でも殘つて居たと致しますれば今日お出で下すつた御親切でもう消ねてなくなつてしまひました。御心配は下さいますな。

今日まで私が獨身で居ますのも私の勝手でございまして失戀の悲しみが消えないからではございませぬ。其の點も御安心下さいませ。此の後も事によりましたら長く獨身で敎員をするかも知れませず、或は宗敎の方面に向きをかへるかも知れませぬが、失戀の悲しみからではございませぬから御心配は下さいますな。それと反對に結婚だつてするかも知れませぬが、結婚したからといつて全く貴郎を忘れてしまつたのではございませんよ、女は男の方とは違つて二度と戀は出來ないと申しますがどうも眞らしく思はれます。私ももう人を戀する事は出來ますまい。努力して愛する位が關の山でございませう。努力して戀を捨て努力して人を愛す、これが今の社會では普通なのでございませう。これから後、以前の樣な淸い御交際が願ひたいとも存じますが、折角努力して消した燃えさりにまた火が燃えて來たりしてはなりませぬからやつぱり別々の天地に別々に暮していただきます方が修養のつまない私には安全でよいしい。又大悟徹底して修養が至極にとゞいた時には御交際を願ひます。ただ忘れもせず執着もせず恨みもせず泣きもせず却つて詩化した戀の經驗をもつ事を今では心窃かに悅んで居るといふ事を御承知下さいませ。何卒先生には御自愛あそばしまして幸福な御生涯をお送り下さいませ。御子孫の御繁榮をも蔭ながら御祈り致して居ります　かしこ

五月十七日

高野達子

永野裕樣

これだけ書いて筆をおいて、二度も三度も讀みかへして見た。端から卷いて封筒に入れかけた。しかし考へて居るとやはり抽象を具體化し、詩を現實化するのは惜しい氣がして來た。それにもしや永野先生は少しも達子の戀を感づいて居られず、凡てが偶然の出來事で達子の想像に止まるものだつたら恥かしい。「その手紙は出さない方が汝の人格を全くする方法だ」と心の奥のどこかで叫んで居る樣でもある。まあよく考へてにしよう、折角書いたのだから破るのは惜しい、今日の心理作用の記錄の樣なものだから、まあ〳〵しまつて置かう、出すのはいつでも出せるから。と、とう〳〵其の手紙は出さないで文集の中にはさげた。そして始めてYさんからの手紙を取り上げて讀む氣になつたのだつた。

Yさんの手紙はかなり大封だつた。大兄さんの嫁に貰ひそこね、小兄さんの嫁に來そこねて以來何となく二人は遠ざかつて居たのだつたが、何を思ひついてこんなに手紙を呉れたのだらう？と不思議に思ひつつ達子は封を切つて讀み下した。

久しく御無沙汰致しました其の後どんなにお暮しだらうかと思ひながらも御伺も致しませず失禮致して居りました。梅雨とは申しながらほんとによく降りますお障もございませんか。月日は早くたちますもので私が結婚生活にはいつてから、もう一昔からになります。まだ子供もなくてほんの二人きりで淋しく暮して居ります。時々は貴姉も御上京なさいませ、そして其の節には是非お立ち寄り下さいませ。扨て日頃は御不沙汰しておきながらたまに手紙を差上げる時には勝手な事を申します樣で大變申し上げにくいのでございますが、物は當つて碎けろだと思つて思ひきつて申し上げます。實は私の義兄本年四十四歳になりますのが先年姉を失ひまして一人になつて居ります。十二になる男の

子が一人ございます。私にはたつた一人の甥でございますが、其の甥が母といふべき人がなくて育つて居るのが可愛さうで見るに忍びない氣が致します。次から次と縁談もある事はございますが御存じの通り家柄を落すまいと存じますと滅多な人も貰へませず長し短かしで困つて居ります。就きましては初縁の貴女に甚だ失禮ではございますがもしやお出でを願へは致しますまいかと存じまして思ひきつてお願致して見ようと筆をとつたのでございます。失禮のだんは平におゆるし下さいませ。義兄も甥も貴女がお出で下さいますればどんなにか幸福に存じます事でございませう。財産と申しましては舊屋敷が目下五軒ほどの借家になつて居ますのと壹萬圓ほどの有價證劵がございますのと位のことではございますが衣食に困る樣な事はございませぬ。義兄は徹頭徹尾禪の人でまあ禪僧といつてもよい位の人間でございます。學歴も何もございませぬが數年前までは銀行界で活動致して居りました。今は遁世的に舊藩主の家扶を勤めて居ります。どうかお心がございますれば銀行界の方でお聞き合せ下さいますればお判りになりますから充分お調べ下さいませ。又私の方で存じて居ります事はお聞き下さいますれば何でもお答へ

致します。自分の義兄をほめるのは何だか變ではございますが家庭に於ける所夫として
は極く穏かなやさしい人間で姉も最後まで幸福に暮しましたのでございます。いくら社
會に出て活躍する腕の有る人でも家庭で氣むつかしいのは一生を一緒に暮す妻にとつて
は良い所夫とは思はれませぬ。我田引水の樣に聞こえますが實際人妻になつて見ますれば
其の感じを深く致します。其の點に於ては私の方が貴女より一日の長と申さねばなりま
せぬ。まあどうぞ御熟考下さいまして何分の御返事を下さる樣御願ひ致します」

達子は讀み終つて一度卷き納めたが、また始からも一度讀みなほした。「何といふ今日は
頭の中の忙しい日だ。十年前の戀人にあつたかと思へば、又十年から前の友人に手紙を貰
ふ。しかもそれが縁談の申し込みだ。これは何か不思議な因縁がありさうに思はれる。永
野さんの方に戀の總勘定をしてしまつて新らしくYさんの義兄さんの方へ頭をむけかへよ
といふ神の命令でもあるまいか？まあ今夜は遲くもなつたし此の返事は熟考の上後日出し
てもよからう」と達子は始めて袴をぬいでキチンと疊んで、其の上に敷寢をしいて床をと
つて體を横たへたのだつた。でも中々に寢つかれないでいつまでも〳〵考へるのだつた。

「達子はBさんなどに比べるとよほど仕合せ者だ、三十一にもなる今日まで次から次と殆
ど絶え間のない程縁談がもち込まれて、選ぼうといふ氣にさへなればいつでも選べる位置
におかれて居たのだ。殊に親や兄姉は熱心に推薦して呉れたものだつたのに、何故感謝す
る氣が微塵もおきずに却つて恨めしく思つたのだつたらう。普通の考方からいふとYさん
の義兄さんよりも比較にならない程よい縁談はそこらあたりにバラ〳〵する程あつたもの
だ。それのに今日まで一寸も顧みる氣になれなかつたのはやはりYさんの義兄さんに縁が
あるのだらうか？禪と云ふ音の響きまでが達子の今の心持によく調和する。再縁である事
も氣易い氣がする。年齢の差のはげしい事と子供のある事は先方の弱點でこちらの弱點で
はない。達子は先方に弱味のあつてこちらに強みのあるのが好きだ。「頭をさげて貰つて
貰ふよりは呉れてやるといふ風なのが氣持がよい」と知らぬ間に蔓つた心の中の自尊心が
云ふのだつた。小兄さんなどが云つて呉れる友人の友人の其の又知人の何某大官や、何々
會社の重役やなどよりも、昔親切にして呉れたYさんの義兄さんの禪坊主といふ方がいく
ら懐かしく慕しいだらう。達子は嫁がうか？でも永野さんに戀した自分は人妻になつてど

うする。この冷たい心がいつの日に温まるものだらう？二人とも不幸の淵に沈まねばならない樣になりはすまいか？などと思つて居るとフト頭もとに一通の手紙があるのを見つけた。不思議だなと思ひながら手にとつて見ると益々不思議！それはYさんの義兄さんから達子にあてたものだつた。開いて見ると薄い墨で文字も文章も禪的に「互に美點のみを見つめて居たら」とそれだけ書いてあつた。妙な事があるものだ。いつの間に此の手紙がこに來たのだらう？も一度讀んで見ようとこんどは起上つて枕もとを探つたが、そこには手紙らしいものはなくランプとマッチとが手に觸れるだけだつた。どこかで鷄が歌つた。達子は夢を見たのだつた。しかし「美點のみを見つめて居たら」といふ句ははつきり目がさめた後も頭の中を占領して居て長く消ねなかつた。

百三十一

Yさんから手紙を貰つた其の週の土曜日が來た。達子は例によつて利休下駄をはいてテクテクと二里餘の道を徒歩で歸省した。この道は達子の肉體が往復するといふよりも精神が往復するといふ方が當つて居る樣だ。何故なら歩く事は殆ど無意識であつて足を運んで居るのも運んで居ないのも神經の中樞では知らずに居るので、ただ他の事ばかり考へる心ばかりが意識せられて居るのだから。其の週の歸省の道は特にさうだつた。熱くなつた頭が達子の家に持ち込まれるといつもの樣に兩親は喜んで「おゝよく歸つて呉れた、親があればこそ二里から上の道を歩いて歸つて呉れるのぢや。さぞ足が痛からう」とニコ〳〵しつつ迎へて下さるのだつた。達子はいつも其の顏を見ると一週間分の疲れが一度に消にてしまつて新らしい元氣が涌くのだが、嫁入でもしようかと思つて居る其の日は格別兩親の歡迎して下さるのが有難くて涙がにじむのだつた。もう他所へ行く事はよさうか？でも又それを心配して居られるのだから行く方がよからうか？來春位は大兄さんが鄕里へ家族をまとめて歸つて來ようかといふ考もあるらしいから鬼千匹の小姑は遠い所へ出て行つた方がよからう、それにはやはりYさんの義兄さんにでも上げてしまへば此の體が所謂片付く。まあ御兩親の御意見次第と夕食の膳に向つた時Yさんから來た手紙の內容を話して聞かせた。天保や安政に生れた人は七百五十石取とか八百石取とか云ふ其の頃の武家の階級をよ

く理解して今もなほ其の價値がある樣に考へて有難いものゝ樣に思はれるのだつた。達子の家は四十石だつたのださうだから八百石のYさんの家と親戚となれば二十倍がけの出世だ。「當世ならこそその樣なおうちに貰つて貰へるのだ」と大變喜ばれるに無理はなかつた。達子は「まあ御兩親が喜んでさへ下されればそれでよい。自棄から此身を捨てる結婚ではなくて大いに意義ある價値ある結婚となるわけだから」と七八歩方決意に近づいた。そこでも一つ考へなければならないのは永野さんに戀した心の古疵だ。それをどう處置しよう？送尿にさへ光輝を認めるといふのが禪趣味ださうだから、疵のあるものは疵ままで價値は認めて貰へようが、默つて臭い物に蓋した樣な事をして熨斗はつけられない。何とかして達子の今の心持を先方に通じたい。其の上でなくては話は進行せられぬと思はれるのだつた。そこで一策を案出した。達子の今日までの心の變化を一朝一夕で書き表はさうといつたつて中々それは書けない事だ。だから先達て永野さんへ送らうと思つて書いた總勘定の手紙あれを送らう。さうだYさんの手を經てあれを送らう。さうしたら達子の心が想像して貰へるだらう。達子はさう思ひついたので月曜日に下宿に歸つて來ると文集に挾んだ手紙をとり出した。そして多少前後の說明をつけ加へて、「此の樣な心の持主をでもお厭ひなくお貰ひになりますか？」と書いて出した。それと同時に兄弟達へ相談の手紙を發送したのだつた。

數日すると色々の返事が集つて來た。姉さん三人は贊成して來たが兄さん二人は不贊成だつた。殊に工科出の小兄さんは人間は活動するものにのみ價値があると思つて居るから、そんな活社會の人間でない禪坊主の出來そこね見た樣な者に行かなくてよいといつて來たのだつた。Yさんの方からは義兄さんの作られた古詩が送られた。大して上手でもない上に禪的な語があつたりして充分に解する事は出來なかつたが、それは「山に雲がかかるのは一種の因緣だ。其の雲が前の山を去つて次の山に移つた所で何の事があらうぞ、すべてが因緣である」といふ意味にとれて暗に達子の前の戀を許容して呉れたものと取られるのだつたが達子にはまだ物足りなかつた。もつと共鳴してほしかつた。少々は自分の貞操觀をほめて貰つてもよい位に思つて居たのだつた。Yさんの義兄さんは貞操を山と雲との關係位に思つて居る。なる程それは禪的だ。しかし此の人は自分自身に女を幾度かへても平

氣な人ではあるまいか？と達子はそんなにさへ思はれ出した。何だか多少自分が思つた程でもない樣なといふ氣もしだしたがそれでも折角詩を貰つたのだから達子も次韻して送つた。そして兄二人が不賛成であるといふ旨も認めてYさんに送つたのだつた。それでも其の後も度々義兄さんから詩が來たり繪葉書が來たりして達子の心を捕虜にしようとするらしかつた。達子はそれが嫌なくせに、女の弱味でやつぱり次第々々に引きづられて行く樣な氣もするのだつた。先方から僧侶姿の寫眞を送られたに對して達子は乞食姿の登山記念の寫眞を送つた。妙な見合ひの寫眞もあつたものだ。そんな點は何だか二人に共通な性格がありさうに思はれるのだつた。「お互に美點ばかりを見つめて居たら」と復思はれた。

百三十二

達子がYさんの義兄さんに對する緣談を決しかねて惑ひ疲れて居る頃こんどは又Bさんから手紙が來た。それがまた達子の惑ひの材料をもたらしたのだつた。要領はかうだ。某會社の課長をして居るBさんの兄さんの工學士が急に妻を失つて困つて居る。それでどうしても貴女に來て貰ひたいと思ふ。家を興して呉れる人は他にはないから無理でもお願ひする」といふのだ。

達子はかねてBさんからBさんの兄さんの話はよくきかされて居た。小兄さんの友人でもあつたので小兄さんからも「あいつは人好で柔道の達人だ」などと聞かされて居た。それを思ふとYさんの義兄さんよりはよささうに思はれもするのだつたが、一方Bさんを思ふと三年も病氣の世話して禮の代りに皮肉を云はれて、最後には言語に絶した侮辱を加へられて此上Bさんの家に對して犧牲を拂ふ事が出來るものか。「Bさん貴女は自分の食ひさしの饅頭を自分の兄さんに食べさせようとするのですか？」と云つてやりたくてならない氣がする。でもさすがにさうも云へず「目下Yさんの方の緣談が大部分まで進行して居るから」といふ理由で斷つて出した。所が例のBさんの性分だから中々其のままでは引つ込まないでBさん自身に達子の大兄さんの奉職して居る學校に押しかけて行つて先づ「お妹さんは御婚約が成立致しましたさうでお目出たうございます」と切り出したのだ。大兄さんが驚いて「私は一向今日まで何等の報に接しませぬが」といふと「それではまだ御決定

ではないのでございますか、實は私は達子さんを兄の嫁に讓つていたゞきたいと存じましたのでございますが」といふと、大兄さんはYさんの義兄さんに不贊成な折柄だから大いに本氣になつてBさんの話に身を入れて聞き出した。Bさんの話によると當人は赤門出の工學士で年も若し家族の繫累といつてはBさんが籍にあるだけだし、不動產も食べて行けるだけはあるといふのだからYさんの義兄さんよりは非常によいと思ひついたのだつた。そこで大兄さんから小兄さんに云つてやると小兄さんは無論贊成で「僕の同窓で堂々たる體軀の持主だ。禪坊主などに比較せられては赤門が泣く」と云つて來た。さう云はれて見るとさうでもあるが、達子はどうしてもBさんに對する恨みから解脫が出來なかつた。こんな嫌な感情をもちながらどうして姉妹の契が結ばれよう？　匿レ怨友ニ其人一。左丘明恥レ之。丘亦恥レ之　達子亦恥レ之矣。だ。十七八日間一切皆空を念じた、あれで達子の道は盡きて居る。とそんなにしか思へなかつた。

所がもう秋風の立つ頃だつた。Bさんの姉さんから一通の葉書が達子宛に來た。何だらう？と思ふと「Bさんが先項から病氣で入院して居るが目下危篤に陷つたから一寸お知らせする」といふ意味が書いてあつた。恨のあるBさんではあるが危篤ときけば哀れな氣がする。さう云つても長い間同じお釜の飯を食べたのだから最後まで美しく交らう。幸明日は土曜日だから思ひついて見舞に行かうと決心した。達子は翌日授業がすむと歸省する所をしないで手土產を持つて大騷ぎしつつ自動車の出る所までかけつけた。六人乘の自動車は其日も滿員だつた。達子は後の腰掛の右の端に乘つたが其の次に達子と列んで腰をかけたのは廿二三貫もありさうな大きな男だつた。もうギッシリ詰つてしまつて身動きが出來ない。ゴム毬を幾つも〳〵小さい箱の中に押し込んだ樣な形だ。お互にひしやげたけひしやげてぢつと我慢して居なければならない。まあ仕合せな事に少し肌寒くなりかけた時候だつたから、暑い時の樣にはない汗も出ず却つて暖くてよい位の事だつた。達子はフト昔小學校の運動會の時に賞品授與をするとて永野さんと並んで立つた所が、生徒がドッと押しよせて來て二人がぴつたり押しつけられた時の感じを思ひ出した。隣の鐵無地の羽織を着て鳥打帽をかむつた男は顏も見ねず若い人か中年の人かさへ判らないが、達子はよい體格の異性から今押しつけられて居るのだと思ふと、妙に嬉しい樣ないつまでもこんなにして

居たい樣な氣がしだした。所が其の人は四里餘行つた所で下りてしまつた。もう一里たらずで驛につくのに。達子は何だか自分があの人から快感を貪つたのをあの人が知つて憤慨して下りたのではあるまいかといふ氣がした。そして達子が嘗て同じこの道を乘合馬車で今とは逆な方向に通つた時に、肺病らしい片目の男が達子の眞向ひに腰をかけて居て馬車がガタガタ搖れる度に膝をわざと辷り出して、自分の足で達子の膝を挾んでギュウと力を入れては弛めギュッと力を入れては弛めするので、とう〳〵それが嫌さに中途から下りて二里餘り徒歩で歸つた事を思ひ出した。ほんとに異性の肉體から快感を貪るといふ事は非常に失敬な事だ。達子はどうして此の樣な淺ましい人間になり果てたのだらう？自分が嘗て不快を感じた樣に今日の人も不快に思つただらう惡い事をした。といつて何も自分から能働的に何事をも行つたのではない。たゞ自然に感じたに過ぎないが、でも濟まない樣な恥かしい樣な氣がする。こんなに肉感に飢ゑる程墮落する位なら早く誰とでも結婚してしまはなければ例の關所がやがて來る。醜態を現はす番手が自分に來て居るのだ、と脊から冷水をあびせられた樣にゾッとして震へ上つた。

自動車は驛の待合の前でポーポーと二聲あげておいて止つた。これからまだ汽車で十四五哩行くのだ。達子は自動車の車體にまで恥かしい樣な氣がしてコソ〳〵と下りて汽車の方に乘り移つたのだつた。

百三十三

達子がO市について病院に行つて見ると、なる程Bさんは白いベッドの上に寢て居て、姉さんがついて看護をして居た。體温表の赤い線もギダ〳〵と妙義山の頂の樣な形をして居た。しかしBさんはさう危篤といふ程にもないらしくよく話をする事も出來るのだつた。

B「ほんとに御遠方をよく來て下さいました。姉が貴女に私の病氣を知らせると云ふから私が『知らせたらあの人はすぐに見舞に來て呉れるからそれぢやすまない』といつたのに『來て下さりや丁度よいぢやないか』といつてとうとう知らせたのですよ」

Bさんはすまなさうな表情をしてさういつた。

達「そんな遠慮がいりますものですか、來たつてよろしいわ。まあ危篤といふのだからど

んなに悪いのかと思つて心配しましたが、思つた程でもないらしくて安心しました。神經をしたりしちやいけませんよ。何でそんな顔をしてゐる位で死ねますかホ、、、」

と達子は元氣をつけてやるつもりで笑つた。Bさんもニツコリして目をそらした。Bさんの姉さんが達子の袖を引つ張つて廊下の方につれ出して人の居らぬ所へ連れて行き〳〵

姉「二三日には大變惡くてもう助からぬかと思ひましたら、今日はまた折り合つてあんなに物もいふたりする樣なりました」としきりに云ひわけらしくいふのだつた。空いて居る病室内にはいつてそこに落ちつくと、

姉「どうも御遠方をよく來てやつて下さいまして有り難う存じました。妹もどんなにか喜びます。もう貴女がよい方だといふ事を口くせの樣に云ひつゞけて、こんども兄が一人になりますともう『高野さんを貰はねば他には貰ふ人はない、あの人なら家も興すし兄をも大切にして呉れる、どうしてもあの人を貰へ〳〵』といふてきかないのでございます。其れに私の主人も貴女をよく知つて居ますし叔母も知つて居ます、それ等が皆貴女を貰ひたがつて居るのでございます。財産といふても食べるに差支のない位な程度しかございませんし、再緣だつたりして失禮なお願とはよく存じて居ますが、どうぞも一度お考へなほしになつては下さいませんでせうか？そしたら妹も安心して死にます。あの子の最後の願でございますから、どうか御承諾下さいまして安心させてやつて下さいませんでせうか？弟も貴女のお兄さんと友達だつたさうで高野君の妹ならとあれも貰ふ氣でをります。今丁度會社の用事で出張してこちらに參つて居ります。別に道樂もございませず體も丈夫で二十二三貫も目方がございます。何なら一度會つてやつて下さいませんでせうか？」

と中々熱心に豫定の雄辯らしい雄辯を揮ふのだつた。間ぬけの達子はやつと氣がついた。狂言をやつて居るのだな。危篤の報せで呼びよせて一杯食はしたのか、やれ〳〵Bさんの姉さんは策戰がうまいな。御熱心は有難いが方法はいやだ。儒教では權謀術數を卑しむ。殊に「最後の願ひ」と云ふ言葉をきくと例の折の事が思ひ出されて一層いやだ。何だか狂言だつたと思ふと今日自動車に一緒に乘つた肥ゐた人も臭いな。と思はれ出した。

達「私の樣に不束な者を御親切に被仰つて下さいまして有り難う存じますが、まあ當てにあそばさないで他の方をお探し下さいませ、色々考へねばならぬ事もございますから」

と達子はそれとなしに斷るつもりで云つた。

姉「まあどうぞも一度お考へなほし下さいませ、あの子の最後のお願でございますから……」とまた念をおしていふのだつた。

達子はBさんに「又何度でも來ますよ、自分からもう死ぬる〳〵これで最後だなどと思はないようにして下さい、お互に用心して長生きしませうね」と挨拶しておいて病院を出て其の夜は中姉さんの家に泊つた。

中姉さんに今日の話をすると「それはまあお前の考次第にするがよいが、姉さんはまあ平百姓のBさんの家よりは七百五十石取のお馬廻りだつたYさんの義兄さんのお家の方が遙かによいと思ふなあ、しかしいつぞや姉さんが世話しようと思うた人ほどよいのはもうないなあ。今にあれが惜しうてどうもならん、もうあの方は奥さんを貰はれて男の兒が出來た。お前があの時行つて居つたらどんなに仕合せかといつでも思ふのですよ。今度のは兩方とも再縁で財産ぢやつてそんなにないぢやないか。それでもお前は行かうかといふ氣になるとは不思議で仕方がない。まあ姉さん等の樣なつまらん者が彼れ此れといふてもお前にはお前の考がある事ぢやからなあ」と笑ひ顔をしつゝも一寸皮肉られるのだつた。厭制をしそこねた中姉さんは一足飛に不干涉主義になつたらしい。達子も笑ひつゝ「すべて時の力と神の力とですよ」といつたけれど中姉さんには意味が通じなかつた樣だ。

中姉「まあすんだ事はなんぼ云ふても仕方がないホ、、、今晩はもう遲いぢやらう早くお休み」

達子は其の翌日また汽車と自動車とによつて奉職地の下宿まで歸つたのだつた。

百三十四

達子の心はほんとに仕方のない決斷の惡いうろたへ心だ。Bさんの方をすつぱり斷はるには二十二三貫もある堂々たる體格が目の前に髣髴とする。Yさんの方を斷らうとすれば達子を自由の野に放しておいて迫はず迫らず、しかも根本的に心の中に知らぬ間に食ひ入らうとする禪的の大きな力が遠卷に卷いて居るのが感ぜられる。どちらへどう道を開かうか？筮竹をとつてガシヤ〳〵云はせて下つて見ると、屯の卦の六二、屯如邅如乘レ馬班如匪レ

寇婚媾女子貞不字十年、乃字といふのが出た。即ち「物が行きつまつてぐるぐる廻りをし馬には乗つたが進まうか退かうかとうろたへて居るが、しかし其の迫つて來て居るものは寇をしようとして居るのではなくて婚姻しようと求めて居るのだ。女子が操正しくて婚姻を許さぬ事が十年だつたがもう其の屯難が去つて婚姻する」と云ふのだ。達子の今の狀態をよく云ひ當てゝは居るが將來をどうしてよいかは判らない。達子は末はまあどうなるかなるに任せるとしてさし當りの屯難から拂ひのけようと思ひついてBさんの兄さんに手紙を出す事にした。要領はかうだ。「私は長い間Bさんと一緒に奉職して居て御厄介になつたものでございますが此度はBさんの發議によつて不束な私を御所望下さいまして有難い仕合せに存じます。就ては早速歡んでおうけを致すべきでございますのに、どうも私の心に一つ障る事がございまして今日までお受けを致し兼ねて居ります次第でございます。どうかして其の障りを取り除いて忘れてしまひたいと存じますが、どうにも私自身の力では出來ないのでございます。そこで赤裸々に貴郎に申し上げて御了解をでも願つたなら、或は又忘れられる樣になるかも知れないと存じまして筆をとつたのでございます失禮のだんは平にお容し下さいませ。實は其の心の障とり申しますのはBさんと私との間でございます。一寸説明は致し兼ねますが私がBさんから言語同斷の侮辱を嘗て受けたのだと思し召して下さいませ。私はどうにかして其の憤怒から解脱致したいものと努力致して居りますが修養の足りない私にはまだ其の自由が與へられて居ないのでございます。このいまはしい記憶や感情を持ちながらBさんと姉妹の縁を結ぶのは僞りの行爲だと存じます、時の力か愛の力か悔い改めの力か何か其の樣な力によつて私の此の心が一掃せられましたならば私は始めて喜んで貴郎のものになりたいと存じます」といふのだ。達子はそれを書き終ると封筒に入れて封じてしまひ、もう一通Bさん宛のを書いて「御面倒ながらお兄樣に別封をお取り次ぎ下さい」といつて悉皆Bさんにあてて出したのだつた。

まあかうしておいたらどの樣にか局面が展開するだらう。Bさんはあの手紙の封を切つてどんなに思うだらう？兄さん宛のをも好奇心を起してそつとあけて讀みはしないだらうか？まあいい讀んだつてかまはない本當の事だから。却つて悔い改めに導いてよいかも知れないと達子は心窃かに思ひながら、投げつけた石礫の當つた音を聞かうと耳をすませて居

た。數日するとBさんから重い手紙が來た。謝罪だらうか？返送だらうか？と思ひつつ封を切ると返送だつた。「どうせお斷りになるものなら兄と御文通をなさる必要もあるまいと思ひますから」といふ理由が書いてあつた。封じ目を見たがあけて見た形跡はないらしかつた。「まあ〳〵これでBさんの方の問題は結末をつげて心の荷が半分輕くなつたわけだ緣がなつかつたさうな」と達子は思つて、返つて來た手紙をメリ〳〵と碎つて火の中に投げ込んだが何だか淋しい樣な氣もどこかでするのだつた。

Bさんは其の後本當に度々危篤に瀕しては復おり合ひつつ長い間病院に居たのだつた。達子は都合のつく限り度々見舞に行つた。「罪は憎んでも人を憎む筈はない、やつぱり氣の毒な人は氣の毒な人なのだ。本能に負かされた人、親のない人、病氣の人、達子は其の人と因緣があつて友となつたのだ。慰めてあげなければならない。努めて親切にしよう、それは決して自己を僞るのではない」と思つたから。

Bさんはとう〳〵病院で死んだのだつたが、死ぬる前に達子が見舞に行つた時、痩せた生白い手で達子の手を取つてポチリと一滴目元に露を光らせながらBさんは云つた。「死んでもねね、貴女の御恩は忘れませんよ。私の罪は容して下さいねね。そして、貴女は早く結婚なさい。いつまでも一人で居たら氣狂になりますよ。ね、ほんとに發狂しますよ」と達子は其の時始めてBさんの罪を心から赦す氣になつた。そして顏をそむけて泣いたのだつた。Bさんはそれから數日後にあの世の人となつてしまつたのだつたが、達子の耳底には「氣狂になりますよ、ね、ほんとに發狂しますよ」といつた言葉が其のまゝいつまでも生きて居て、本當に今にも氣狂になりさうな氣味惡い豫感が日々襲ふのだつた。「ナーニそんな弱い自分ぢやないぞ」と打消し〳〵して見ても、心の底の底では肯定せずには居られないのだつた。

百二十五

或日の事達子は學校でいつもの樣に教壇に立つて敎へて居たが、板書しようと思ふと又例によつて白墨を忘れて來て居たので、もしや小さいきれでもと机の中を探つて見た。手にあたつたのは白墨ではなくて大きな一握もある鉛筆だつた。「オヤ大きな鉛筆！」と思ふ

刹那に「あれの樣だ」と變な聯想が頭をかすめて去つた。停車場の便所の中の落書で見るより外に實物といつては子供のさへも見た事のない物を想像したのだ。殆ど本能的想像だらうかと思はれる程達子にとつては奇拔な想像だつた。今まで戀はしてもこんな物の事は考へなかつた。永野さんの寫眞を抱いて寢てもそれはお守り札を身につけて居ると同じ心持からだつた。ふと變な一事が思はれるといつてもそれは體全體の抱擁を想像したに過ぎなかつた。「アーア私もいよ〳〵氣狂になりかけたのぢやあるまいか？」と思ふと敎壇に寸時も立つては居られない氣がする。「先生らしい顏をして何を喋つて居るだらう？やれやれ恥かしや、敎員はやめよう、ひどい氣狂にならない前に」と思はれた。それからといふものは其の敎室に行くのが何だか恐ろしくなつて來た。そのくせ行くといつても「あれがまだ有るだらうか？」とそつと探つて見たい樣な氣がするのではあるが。

其の頃から本當に達子の心は變つて來た。抽象的から具體的に、理想的から現實的に、そして非常に廣かつた天地は次第に狹められ、其の反對に心の空虛は日一日と大きくなつて來、重心がどこにあるか判らなくなり、あれ程面白かつた敎員といふ仕事にも氣乘りがせなくなり、何か知ら不安さが晝も夜も襲つて來て、達子の影を薄く小さくしてしまつて、生きがひない樣な、とぼしない樣な氣にならせてしまふのだつた。「親や兄姉の老病死、それを想像する事が此樣に淋しく思はせるのだらうか」とも思つて見るが、でも末つ子は一人だけ生き殘らなければならぬとは、かねて思つて居る事で此の頃でさう急に淋しくなる筈はない。「やつぱりこれが氣狂になる前兆だらうか？」「なれば色氣狂だ。恥かしい事だ。先夜もフトあんな事を思つたぢやないか？それ。Bさんが嘗て達子に乘つかかつて來た樣に、どんな男が將來達子を自由にする樣になるだらうか？達子は全體何と云ふ姓を名のる因緣があるのだらうか？とそんな事を考へたぢやないか」「もう〳〵そんな事を考へる樣になつては人間は末だ。形而上的な若い時は尊い。こんな醜い心を持つて先生だとは生徒にすまない。何でもひどく氣の狂はない前に敎員をやめよう、お正月が今に來る。すると三十二といふことになるのだ。いよ〳〵關所だ。俗にいふ前厄でもある。氣狂になるか、醜態を現はすか、自殺するか、病死をするか、結婚するか、尼になるかだ。今六道の辻にさまよつて居るのだ。來年はとの道へはいるだらう？」「だらう？位で捨てゝは置か

れないな。他人事ぢやないのだから自分で選ばなけりや」「現狀維持がどうしても出來ないとすれば六道の内では結婚道かな。親も安心、戀人も安心、自分も安心――かどうだかそれはして見ねば判らぬが――まあ〳〵氣狂なんかになつたりボロを出したりするよりは此の道に入るべしか？」達子はこんなに考へて來ると何物かに追ひ立てられる樣な氣がする。其内に年はとう〳〵あけた。一月十九日が來た。それは永野さんの結婚記念日だ。そして達子の失戀の記念日だ。しかも十回目の。達子は其の日思ひきつてYさんに「義兄さんがお貰ひ下さるなら嫁いでもよい」といふ意を申し送つた。

數日するとYさんから大變滿足したといふ手紙が來た。そして「近いうちに義兄が法要の爲にO市まで出かけるから貴姉も一度O市に行つて會つてやつて呉れ、その上で互に意氣が投合したならば序に式をもすませてしまつたらと思ふ。話の順序は大變ちがふが紋服は云々夜具は云々結納が云々」などと詳細な事まで云つて來たのだつた。

Yさんからそんな事を云つて來るのは達子が承諾の旨を通じたからの事で、何も不思議はないのに達子は今更の樣に驚いた。それが自分の身の上に關する事だとはどうしても思はれなかつた。「ほんとにこれが私の事だらうか？本月末に見會ひだなんて、本月末つたらもう七日しかないぢやないか？嫌だな。そんなに急いでは。無期延期も今更云はれまいがどうしよう？」

達子は考へた末「暫く延期してくれ」と云つてやつたが、折返し返事が來て「既に候爵家へ御暇を賜はる樣に願つてしまつたから期日の變更は出來ない」といつて來た。

達子は十六武藏の雪隱詰にあつた樣な氣がした。自暴自得とはいへ、ああ嫌だ〳〵〳〵私はやつぱり結婚は嫌だ。昔の戀を戀して淋しく暮す方が私の眞の願の樣だ。それを本能や周圍の光景におどかされたのだ。ああ何故あんな手紙を出したらう？つまり自分で自分が判らないのだな。困つた自分だ。困つたとばかり云つては居られない、もう明後日が見會の日ぢやないか」そんなに考へて居ると頭がグラ〳〵して體から消耗熱が出さうに思はれる。觸つて見るとほんとにポカ〳〵して居る。檢溫器をかけて見ると三十八度五分。達子はとう〳〵床をのべてもぐり込んだ。醫師は流行性感冒だと診斷して呉れた。Yさんへは早速電報で其の由を通じた。

達子は焔の樣な息を吐きながらも「ああよい時に病氣になつたものだ。人間の心も電流の樣に抵抗の大きい通りにくい所へさしかゝると、發熱したり發光したりするのかもしれない。まあ〳〵これで見會ひはのがれるだらう」とホッと安心した。安心すゞと同時に熱は下り坂に向ひかけた。見あひと豫定せられた日がすむと熱はもうすつかりとれてしまつて頭も輕くなつた。「流行性感冒といふのだから命でもとられるかと思うて心配したが、まあ早うなはつてよかつた」と父上は白い眉を開かれる。母上は母上でニコ〳〵しながら、「内祝ひにお赤飯でもしませうか」といはれる。達子は何年ぶりにか親の許で病氣したのだ。何につけても親はよいが病氣の時は格別じみ〳〵と有難さが身に浸むのだつた。やさしくなられればなられる程寄る年波が數へられて悲しくさへ思はれた。

達「丁度一週間學校を休みました。もう月曜から行かれませうよ此の順なら。明日はお床をあげて私もお赤飯をこしらへて下されば手傳ひます、ほんとですよホ、、、それに今日

は節分明日は立春。春になるのですよ春に。あゝ晴々と嬉しい氣がする」

達子は床の上に起き上つて亂れた髪をかき上げながら云つた。病氣回復期はいつも人間が新らしくなつた樣に見るもの聞くもの皆嬉しくつて感謝でもつて充たされるのが達子の常だ。翌日は子供の樣に無邪氣な氣分になつていそ〳〵と床から抜け出て髪を結つた。「私のすきなお赤飯が出來るのだ」とほく〳〵しながらお竈の前に坐つて火を焚いて見たり、蒸籠からフーッと白い蒸氣が噴き出すと、蓋をとつて紫色の小豆の汁を注ぎかけたりして徒ら半分手傳つて居ると、聞きなれない人が、

「御免下さい、高野さんはお宅でございますか？達子さんと被仰るお嬢さんがいらつしやいますか？」といつて表庭に訪づれた。達子は其の聲をきくとズシンと胸に鐵盤でも投げつけられた樣に驚いた。「ああ來たな。あの人がとう〳〵やつて來たな」とぶる〳〵と胴震ひがするのだつた。日雇した婆さんがやがて名刺を持つ來たが、想像にたがはずそれはYさんの義兄さんだつた。達子は途方にくれてお母さんに出て會つて貰つた。

「エー、貴女がお母樣で被入いますか？ウーム、達子さんは御病氣と申す事を承りました

ので御見舞旁々實は押しかけがましくて失禮かと存じましたが――折角お近い處に參つて居りながら御目にかからずに歸りますのも殘念と存じまして突然罷出ました次第で――どうかまあ失禮のだんは平にお容しを願ひます、ウームそこで達子さんはこちらにお出でなのでございますか？御奉職地の御方で御靜養？　あ、左樣でございますかそれは丁度幸でございました。少し離れすぎて居りますので御樣子が一寸判り兼ねましてハ、、、それで？御病氣は？ああそれは御結構で、御枕許で暫くの間お話をさせて戴きましてもお障りになる樣な？あゝそんなによくおなりで、まあそれはお目出たう存じます」

こんな話が手にとる樣に聞ゐて來る。他人事を客觀して居るようにはもう思つて居られない。この自分が今すぐ出て會はなければ義理がすまないのだ。達子は仕方なく着物を着かへた。といつて紋付でも何でもない、お母さんの手織の綿服に過ぎないのだ。禪坊主と乞食の比久尼との見合には好適な筈だから。達子の度胸はもう据つて居た。お茶を持つて出て進めて一禮して「お初にお目にかゝります私が達子でございます」と挨拶が終ると頭をあげてキッと相手の顔を見た。それはまるで敵に對する時の身がまへだつた。達子にはもう其の時は仇か何ぞの樣にしか思はれなかつたのだ。廣い長い額にサッと紅がさすのを確に見とどけた。向ふが女で達子の方が男であつたら相應して居る瞬間の光景だつた。達子は常々よくして仕方のない恥らひ顏をも其の際は決してせなかつた。恐らく其の時の達子の目色を人が見たならば、憎惡と輕侮とがまざ〳〵と現はれて居た事だらうと達子は自分で後からそう思つた。そして臺所の方へ下つたきりもう二度と座敷へは出なかつたが、Yさんの義兄さんの方ではも一度出させたいらしく、

「エー此の度は不思議な御緣で失禮な事をお願ひ致しまして、まあこゝまで話が進行致しまして大變喜んで居ります次第でございます。達子さんは學校でも御成績がよくて秀才といふ御評判も承つて居ります。私如き取り所もないのにお讓を願ひますのは御無理と申します事は充分承知致して居りますが、何分一つ御辛抱を願ひまして、是非とも御讓り下さいます樣に御願ひ致したいものだと存じて居ります。それにつきまして一應何が好きとか嫌とかいふ樣な事をお互に話し合ひまして見ますのも强ち無益な事でもありますまいかと存じまして、突然に押しかけがましくて失禮だとは存じましたが罷り出ましたのでハ、、

ハ、どうぞ先生お手煕をお用ひ下さいませ。御遠慮なく」

と自分の火鉢を押しやらうかといふ風をして居るらしい。達子は婆やに命じて火鉢をも一つお父さんの所に持つて行かせた。それから話はだんだんお父さんの世界に食ひ込んで昔の儒者から今の儒者となり遂にお父さん程の大儒は今の世にはないと稱揚して著書をくれだの揮毫をくれだのと持ちかけた。お父さんは「いや私は書家でないから字は至つて下手で」といひつつも半折を出したり、「詩人ではないから」といひつつ詩集の様なものを出したりして居られる。お母さんが「手料理でございまして」と御飯を薦められると、又「これも結構であれも結構で、あまりおいしいからもう一つ戴きます」と茶碗を出される。お母さんはニコ〳〵しながら臺所へ下つて「おいしく出來るといはれたよ」と小聲で達子に云ひながら赤飯をよそつて又座敷にもて行かれた。座敷では「ハハアーこれは達子さんの御手際ですか？學問をした方はお臺所は出來ないものかと思つて居ましたのにそれは感心ですね」といふ聲がして居る。達子はさき程から田舍の人は正直なものだと思つて居たくせに、自分がほめられて見ると今のだけはお追從でなくて本氣の聲だつたと云ふ氣がせ

られるのだつた。

百三十七

Yさんの義兄さんはいくら待つても達子が二度と顔を出さないから、とう〳〵歸る挨拶を初められた。お父さんもお母さんも娘の婿に別れる樣な懷しみのある言葉で送り出して居られる。達子はもう下駄を穿かれたと思はれる頃を見計らつて廣敷まで見送りに出た。

義「どうも御邪魔を致しまして、御馳走にまでなりまして有り難う存じました。これは面白くもございますまいがお隙がございましたらお讀み下さい」と小さい本を達子の前に差しおいてYさんの義兄さんは歸つて行かれた。親子三人は門外まで送つて出た。其の時はもう達子も敵に對する樣な嫌さは忘れて、すらりと脊の高い後姿を見ねなくなるまで見送つたのだつた。

其の事あつて以來達子の心は益々動搖かはげしくなつて來た。「私は本當の心は結婚を嫌がつて居るのだ、それのに本能から出る衝動がまぜかへすのだ。何でそんなものに胡麻化

されるものか。眞の自分の天地に生きよう」と考へるかと思ふと、「大姉さんは見ても身震ひのつくほど嫌な亭主に何十年も添つて居られる。中姉さんは離れたくない良人と別れて歸られた。小姉さんだつて好んで行かれたのではなかつた。大兄さんもいや〳〵ながら貰はれたのだつた。皆自分を殺して周圍の人を生かされたのに、達子一人が自分を生かし拔かうとするのは我儘だ。何度も何度も死んだ筈の達子が一番强く生きようとして居るとは矛盾も甚だしい。死に序に全部死なうか？『美點ばかりを見つめて居たら』といふ句には何やら眞理がありさうだ。自殺を覺悟して飛び込んだ淵の底の思ひがけない活路かも知れない。どうせ誰と結婚するのも嫌なのにちがひないから、せめて年とつた兩親の悅ばれる人の許に行く事にすれば、死んで行くのに多少の意義でも增すわけだ。どうせ葬式を出すなら花環の一つも多く持つて行かうといふ、いはば打算だが。

達子はYさんの義兄さんから貰つた禪學の書物を或る時には爪彈きして投げ出したり、或時は撫でまはして開いて讀んだりした。一日のうちに何度變るかわからない自分の心をどう始末をしてよいか自分ながら見當がつかなくて、息づまる程苦しい思ひをして一日一日と過して居ると、Yさんからはエンゲージリングを送るから指の寸法を云つておこせと云つて來たり、結納を何日に送らうかなどと云つて來たりするのだつた。其の度に達子は重い石を頭の上に被せられる樣な氣がした。でもそれをはね返す程の勇氣もなくたゞいろんな理由をつけて延ばせたけ延ばすのが力一杯の働だつた。

其のうちに學年末が來た。大兄さんはいよいよ達子の居る町の中學校に轉任せられる事になつた。達子は自分で自分の現在は周易でいふなら夬の封の上六だと思つた。何でも親孝行は大兄さんに讓つておいて自分から出て行かなければならない。无レ號終有リ凶だ長かる可からずだと校長にも退職の意を洩して後任を探して呉れと賴んだ。そして一方Yさんの方に結納を送つて呉れてもよいと云ひ送り、小兄さんに同じ土地に居るのだつら親代りとなつて萬事Yさんと交渉して呉れと賴んでやつた。達子はただ鬼千匹の小姑となつて義姉に氣苦勞をさせるのだといふ豫想から來る不快さによつて決意を促されたので、Yさんの義兄さんに對する愛情が寸毫も深まつたのでもなく敬意が增したのでもなかつた。だから心のどこかでは非常に劇烈な反對な聲が起らずには居られなかつた。「お前の決意には誠

意がどこまである？骸の取り片付けにばかり誠意があつて埋められる先の迷惑をば顧ないのか？やつぱりそれは利己ぢやないか？人を欺くのではないと云ひ得るか？そして本當に死にきる事が出來ると自分で本氣に思つて居るか？もしも死にきれないで骸が動き出して石塔がもち上り出したりした日には一層氣味が惡くて、埋められた墓地のまはりの迷惑は甚だしいぢやないか、其の樣な事は決してはないと斷言する事が出來るといふお前の心に確信があるかどうだ？」さう云はれて見ると達子は一言ない。さうかといつて長い間引つ張りぬいてこゝまで來た緣談を、今となつて碎いてしまふのも不義理な樣で、どちらに進む事も退く事も出來ない所謂進退維谷まつたわけだ。どうしてこんな所へ來たものだらう？と狐につまゝれた樣にキョト〳〵してあたりを見まはしても、目に入るものは自分の足跡ばかりで誰を恨むわけにも行かなかつた。といつて諦め果てゝ絕壁の上で坐禪をする程の度胸も据はらず、足がビリ〳〵して目がまはりさうで泣き出したい樣で今にも氣絕するかと思はれる樣にあたりが暗く〳〵〳〵なつて來るのだつた。「死にさうな〳〵〳〵」と思ふのは「まだ生きとる。まだ生きとる。まだ生きとる」といふ自分の生命の認識で、同時に「生きたい、生きたい」といふ願望が含まれて居らぬわけには行かなかつたのだ。

東京の小兄さんから「僕はどうしても此の緣談には不贊成だ。僕に全部を任す親代りになれといふのなら僕はぶち碎いてしまつてやる。現代に活動もして居ない死んで居ても生きて居ても差支ない樣な人間に僕の妹は決してやらぬからさう思へ。以後に於て決してグズグズ云ひ出すな」と云つて來た時にはホッとして夜が明けた樣な氣がした。達子は神樣に救はれた樣に思つた。

しかし平坦な土地に戻された達子は、茫然としてあたりを見まはしつつ暫くは佇んだが、「さてどうしよう？」と再び考へずには居られないのだつた。

百三十八

達子は十二の歲から願ひを起して獨立獨行の天地に至らうと、どんなにそれを憧憬れ望んで來た事だらう？しかし到着して見ると、豫想以上の愉快さもあつた代りに又豫想外の淋しさもあつた。わけて配偶者を選んで決定しようといふ段になると誰もが不干涉であると

いふ事はたまらなく淋しく苦しい事だつた。壓制せられる時には自由を望むが、自由が得られると或程度の壓制が望ましくなつて來る、人間の心は振子の樣なものだ。Yさんの義兄さんをば殆ど達子獨りで選んだ樣なものだつたが、それは不愉快な苦しい經驗をなめたに過ぎなかつた。自由に選擇せられてよいとは思はれなかつた。小兄さんの最後の手强い干渉をどんなに嬉しく有難く賴もしく思つた事だつたらう?自力で運命を進展して行くのもよいが、淋しく苦しい事だ。外界に對して氣兼ねの多い責任の重い事だ。「もうよう加減にして置かう、他力に任さう、南無阿彌陀佛だ。どんなになりとして下され。やれ〳〵これで荷が下りた」と達子はとう〳〵自分を投げ出して兄さんや姉さん達に賴む事にしてしまつた。丁度其の頃は大兄さんが轉任して達子と同じ町に住んで居た。達子は嘗て校長に向つて大兄さんが此の地の中學に轉じたら私は退職するか他に轉任するか致しますと申し出て置いたのだつた。其言を履むべき時も來て居るのだ。それのにYさんの義兄さんの方の話をやめにしたのだから達子は心で次の緣談が急がれもしたのだ。「美點ばかりを見つめて居たら」などと考へて居る時代はまだ死にきれない證據で、まるで死んだ人間には美も醜も長も短もある筈はなかつた。相手は何だらうがたゞ自分の足許ばかり見つめて社會の作つた一定した道を眞直に歩きさへすればよい。それが死んだ人間のする事だつた。

任された兄姉達は、今まで意地っ張りの不從順な仕末のつかぬ奴と思つて居た妹が俄にすなほになつて萬事任すと云ひ出したので、それぢや一つ世話してやらうと新らしく見つけ出して來たり、昔云ひかけてやめになつて居た話を復活させようとしたり、思ひ〳〵に色々と達子の墓地の選擇を始めて呉れるのだつた。いざ死なうといふ場合に自分で懷劍を腹に突きさすよりは、人が後から首をコロリと落して呉れる方がいくら雜作がなく、容易であるがと達子はつく〳〵思つたのだつた。

五人の兄姉と大勢の親戚知人が奔走周旋して呉れる中に、特に小姉さんの良人は親切に周到に候補者の家に自分で行つて墓地の實地踏査をし骸を守るべき人にも會つて、これなら大丈夫といふ見定めをもつけて呉れたのだつた。十數年來何十か何百かの緣談があつても達子が任すと一口も云はなかつたからでもあらうが、誰も未だ嘗て此の樣に熱心に身を入れて責任を持つて檢べて呉れた事は一度もなかつた。達子は其親切を非常に多とした。そ

れに報ゆるに自分の運命の決定權を全部任せてしまつてもまだ足らない位に思つたのだつた。それは一人旅をして來た淋しさの反動でもあつたらう。早やそれだけで此の縁談は八九分方成立した樣なものだつたが、其の上に達子の決意を促がす二つの有力な動機もあつた。一つは大兄さん夫婦の賛成せられた事だつた。もし大兄さんが不賛成であるに拘はらず達子自身に選んで決定したのであるならば、不幸にして實家の世話にならねばならぬ時がもしもあつた場合にどんなにそれが氣兼ねであるか判らない。處が後嗣である大兄さんの賛成し決定せられたものであればそんな氣兼ねがいらないといふ打算めいたづるい考、しかしそれは世間普通の考方でしかも空想的から現實的になつて來た達子には新鮮な考だつた。今一つといふのは昔の達子即ち若かつた時の達子の心を呼び起して共鳴をさせようとする一つの音響だつた。それは骸を守るべき人から來た告白の手紙だ。曰く自分は先妻を失つて滿三年になるが、先妻に對する愛着の情がまだ去らない。それが爲に周圍の人が如何に勸めて呉れても今日まで貰ふ氣になれなかつたのだ。それでも我慢して來て呉れるなら先妻の再來として自分は迎へよう。先妻は斯の如く忠實で、先妻は斯の如くよく働いて、先妻は斯の如く交際が上手だつた、とさん〴〵先妻の美點を列擧して、其の後を繼ぎ得るかどうだ。といふ樣な、まるて入學試驗の口頭試問よろしくの手紙だつたが、達子は其の正直さが先づ氣に入つた。それから自分と同じく此の人も失戀の味をなめて美しい執着を持つて居るのだと思ふと何となく他人らしくない懐かしい情も起きた。それはYさんの義兄さんの貞操を山と雲との關係と同一視したのに慊らなく思つたのと正反對で、達子の心にガッシリと當て嵌るものだつた。死を覺悟した達子に「死なせはしないぞ」と囁く聲の樣にも思はれて、嫁がうと決意する動機を作るに十二分の力があつた。しかしながらYさんの義兄さんが遠卷に卷いてヂリ〳〵と達子の心に食ひ入り、心の底から自分を好きにならせようならぬならなるまで待たうとした態度と反對に、後妻をして一足飛に先妻の鑄型にはまらせうとする氣の短かさは「頭から尻尾まで一度に死んでしまへ」と嚴命を下して居る樣に思はれて、恐ろしい樣な嫌な感じがして、嫁がうかといふ心を逡巡させる原因とならぬわけには行かなかつた。達子は又笠竹を出して來た。易は鼎折レ足覆ス公餗ヲ其刑剭(ツミナヒコロサル)凶。と敎へて呉れた。鼎の中に實が一杯はいつて重いのに足が弱くて折れてしま

つて、公の大切なこなかきが撒けてしまつて、罪にあひ殺される凶だといふのだ。達子は「其の任でないのだな」と思つたが大兄さんは爻が惡くても鼎の卦はよい卦だからそんなに恐れなくてもよいと云はれた。嫌な豫感に襲はれもしたが、任す筈だつたから任せた。事は電光石火の如く進捗して瞬く間に達子の運命は宵壌の差もたゞならぬ程の變動を來してしまつたのだ。

百三十九

十四五年も逡巡ひにためらつた境遇の轉換は僅か數旬の間に急轉直下の如く行はれてしまつた。一度の見合ひさへせずに。自棄といへば自棄。亂暴と云へば亂暴だつた。しかし時期が到來したのでそれもつまり神意だと達子は思つたのだつた。常陸帶の一夜のうちに結ばれる緣でも、十數年採みにもんだ揚句結ばれる緣でも神意である事は同じだ。一體人間の決意といふものは人間の決意であつて人間の決意ではない。誰がそれを自分で自由にする事が出來るものぞ、自分には出來ると思ふ其の思ふ事それが既に神わざではないか？誰かそれを僞の人といふぞ。あまりにそれは悲しむごたらしい評語ではないか。それは見も知らない人を愛しに行く事はゆくのだ、そして愛し得るか得ないかは豫め知る事は出來ない。でも僞ではない。假令愛し得なくつても懸命に努力し勉强して愛して見ようと現在決意して居る、そこに何の虛僞があらうぞ。「努力を要するのは根本から虛僞である愛する者を愛せぬ振をしたり、愛せぬものを愛する振をしたりしてはならぬ」と一部の人は云はうとするが。それは理想の天國に選ばれて生れた人ばかりが云ひ得る事だ。見よ草が一本芽ばえて生長しようとするに努力を要しないといふ事が出來るか、重い土を押しのけ石の間を潜つてやつと頭を地の上にのぞける。そこに日光と空氣と濕氣と肥料とが適當に惠まれて居れば幸だが、其の中のどれかが不足して居た場合には根を伸し幹をくねらせ枯れるまで尋ねまはつて需めねばならない。それが努力でないといはれようか。年頃になるとそこに良人があつて初戀をし得たお千代さんの樣な人は千人の中に一人あるかないかの寵兒だ。でない人間は販路の廣い八重子さんを眞似るか。醜く死んで行つたBさんを追ふか。淸く自殺した神岡さん——神岡さんの死因は判らないが——を慕つて行くか。達子の姉さ

ん達の樣に大なる勢力の統一の前に自分を投げ出すか。迂回した拙い道ではある樣だが、達子の來る道について來るかしないでどうするのだ。努力しようと決意して努力する努力だ。何の僞があらう？卑しい事があらう？神意と人意と合同して築き上げる創造だ。まだそれは經驗の少ない試みの時人だ。否これから試にかからうとするのだ。だから竣工するかしないかは判らないが殊勝なる試ではあるまいか。一度死んだ人間にして始めて着手すべき事業だ。褒めてよいか譏つてよいかはまだ判らぬが、若い女の人達よ、徒にくづをれたり世をはかなんだりしないでねばり强く研究しませう、工夫しませう、改善しませう、及ばずながら瀬踏みを致します。

こんな心持で達子は長い時間汽車や汽船でゆられつつ先づ小姉さんの家に到り着いて、そこから出なほして墓場に乘り込んだのだつた。T驛についた時始めてチラと見た骸守り其人のいかに痩せこけて頭が出て脊が曲つて居た事よ。達子が今まで體操を生徒に教へる爲に使用して居た掛圖にある姿勢の最も惡き人にそつくり其のままであるではないか。達子は目をつぶつて顏をそむけずには居られなかつた。青田の中を六七挺の俥がうねりうねつて來着いた所、そこは小山の如く鬱蒼と繁つた樹木を高い築土が圍んだ古めかしい大きな屋敷だつた。達子の墓場としては少々廣大すぎると達子は思つた。元祿時代の建築だといふ大きな門を這入ると待女郎が手をとつて勝手口の方に案内した。ついて來た大兄さんや小姉さん夫婦などは玄關口から上つても、花嫁だけは臺所の膳椀の狼籍して居る中に上つて行かなければならぬ。其れが其所の習はしだといふ事だつたが、何だか下女の初目見にといふ感じがせぬでもなかつた。其れから暫くして春寒賜浴華清池でもないがお風呂に入れとの事て風呂場に行つた。風呂場は座敷と次の間と其の次の間とに沿つて居る五六間ばかりの長い椽を行き盡した所にあつた。浴槽に浸りながら窓から外を見ると百四五十坪あらうかと思はれる座敷の庭が側面から見ゐる事になるのだつた。榎や柏や高野槇の大木が二棟の倉を隱して其の前に松や櫻や楓があり、其の又前に琉球躑躅やつゝじやさつきの類が程よく配置せられて石も所々にあり、二つの手水鉢も水上げ石・鏡石・足洗ひ石など法則通り置いてあつて、此の庭園は素人が設計したのではないなと思はれるのだつた。これ位のお庭ならあの手水鉢の邊に燈籠がなくてはならない筈だなどと思ひつつ、暮色のせま

つて來る庭を飽かず眺めて居ると、不思議！灌木の繁みの中に白いものが動めいた！「女だ」と瞬間に思つた。しよんぼりとして何かを訴へたげな表情！と達子はまたたきを二つ三つ急しくして一層眼を据ゑて見ようとするともう其の影はなくて、そこには松の太い幹が立つて居た。達子はほつとりとしたお湯の温りが一時に冷めて夏ながら震へる樣な緊張を覺えた。「今のは先妻の亡靈だ。確にさうだ」といふ氣がした。「よろしい判りました貴女は愛され過ぎて、虐げられ過ぎてお死になすつたのですね。子供ですか？あの一人息子の事ですか？それなら御心配なさいますな私が一所懸命世話をします」と心で云つてすぐ浴槽から出て體をふき始めた。髪を撫でながら達子は、昔梅田さんの姉さんが實家へ行つて逗留が長引いたのを怒つて義兄さんが殺しに行つた事を思ひ出した。刃物をとると取らないとの差そんな事も考へた。

身ごしらへがすむと、お座敷の次の、も一つ次の間で一生一度であるべき華燭の典をあげた。それがすむとお座敷と次の間とを打ち通してそこで親類杯をし、引き續き披露宴を張つた。かくして徹宵飲み明すのが土地の風習ださうな。達子と達子の隣に居る母子に今日からなるべき子供とだけはお餅吸物をいつまでもかかつて食べた。チラと座を見まはすともう皆箸をおいて居た。ブイ〳〵と音をさせて黄金虫が一つ飛んで來た。停車場で目をそむけて以來見ようともしなかつた良人が向側の座に居て團扇で早速虫を抑へてカサ〳〵カサと疊にすりつけてヒョイと掬つてサッと捨てた。其の手早い事。達子は挾んだ餅を口に持つて行く事を打ち忘れて驚いて見物した。恐らく良人の方では人が箸をおいて居るのにいつまでも餅吸物をべたて居る花嫁の氣長さに驚いた事だつたらう。かくして氣短な男と氣長い女とは二人三脚を始めるべく一歩を踏み出したのだつた。

百四十

徹宵の祝宴の興も盡きて夏の夜はしら〳〵と明けそめた。來賓は各々暇を告げて退散し始める。其の時賓客中の一人であつた良人の奉職校の校長は達子を呼んで良人の意志として達子の此の後の心得を訓諭せられるのだつた。其の概要は、第一姑を大切にすべき事。第二に子供を愛すべき事。第三に同居して居る姉と睦じくすべき事。第四に姉の子供が三人

あつて二人は他所に修業に出て居り、目下一人手許に居るそれ等に親切にする事。第五に良人に仕へる事だが、此の第五はどうでもよいから他の一から四までをよく行つて行く様に心掛けよとの事だつた。達子は修身訓話を學校できくよりはもつと緊張した心持で聞いた。そして中々それは自分には大役だが、また良人を第一に愛せと云はれるよりは實行し易い注文だと思つて「出來るだけ努力致しませう」と答へた。達子の方からは小姉さんの良人を通じて「今までの境遇上年はとつて居ても家事に關する事は一切無經驗でこれから新たに學ばなければならぬのでいはゞ今幼稚園に入園した様なものだから其の點を御了解願ひたい」と吳々も云つて貰つたのだつた。双方の云ふべき事が云はれると校長も兄姉達も暇乞せられて達子一人が取り殘された。

達子の其の日の仕事は氏神詣と墓參と近隣へ挨拶にまはる事とだつた。豫定通りの行動を終つて紋服を脱いだのは夜の九時過だつた。良人は椽側に椅子を持ち出してニコ〳〵しながら達子の衣裝がへするのを見て居る。姉さんと姪とは着物を疊む手傳をしておいて部屋の方に去られた。女中は床を伸べておいて臺所の方の下つた。良人と達子と二人きりになつたのは其の時が初めてだつた。達子は何だか恐ろしいものが攻めて來る様な感じがして默つて固くなつて居ると「こちらへお出で」と良人が聲をかけた。「それこそ」と達子の動悸は高鳴り始めた。でもすなほに「ハイ」と答へていはれるままに椽側に歩んで行つた。

良「涼しい風が吹くでせう、こゝは」

達子は手をついて又「ハイ」と答へた。ほんとにそこは涼しかつた。お庭の隅に取り入れた小流れのせゝらぎが煽風器の音の様に聞こゑて居た。

良人「水の音がよいでせう」

達子は又「ハイ」と云つて目をお庭の方にむけたが、笑顔も何も出來ない程心が緊張して居たのだつた。

良人「もうやすみませうか？」

「ハイ」と云はうとした達子の舌の根は硬ばつてしまつた。

良人「今晩は御都合は如何です？一緒にやすみますか？」

達子は今度は「ハイ」とも何とも云はなかつた。本能が一生に一度は必ず體驗させようと

達子を驅りたてこゝまで來させたのではあるけれどいざとなれば恐ろしい事だつた。

良人もさすがに伏目勝になつて「如何です?」と答を促した。達子は思ひきつて、

達「かうなりました上は如何樣になりと御自由にあそばして下さいませ」

と云つた。しかし良人の耳には聞きとれなかつたのか「ェ?」と聞き返されたので達子は「ハッ」と思つた。變な事を云つたものだと自分で氣がついたので「どちらにでも」と訂正した。そしてあまりのきまり惡さにくるりと膝を向けかへてお庭の方にむいた。

かくして一夜明した達子は早朝再び奉職校に向つて出發したのだつた。あまり急な話の進行だつたので、まだ後任も見つかつて居なかつたし達子の荷物も纏める隙がなかつたのだつた。全體一度挨拶に來いとの事でもともと出かけて行つたのが擧式まで進行したのだつたから、再び暇を貰つて後殆末をすべく行くといつたらよいか歸るといつたらよいか判らない旅路に上つたのだ。道々昨夜及び一昨夜の光景など思ひ浮べて居ると流石に微笑ましい氣もせられて、日頃嫌な汽船の動搖も汽車のガタ〳〵といふ音も知らずに旅が出來るのは一種の不思議だつた。でもよく〳〵心の底を解剖して見ると、そこには豫期にはづれた物足りなさが大きな洞穴をあけて居る樣でもあつた。長い間面白いと思つてして居た教員といふ仕事をやめて其の生活に代へるに性的生活を以てするのは、多〳〵の黃金を拂つて贋造の寶を買つた樣な氣がせぬわけには行かなかつた。たつたあれつぱかしの快感を追つて人は墮落するのかと思ふと人の脆さが哀れだつた。でも戀人同志の抱擁だつたらもつともつと快感を覺ゑるのかも知れない。其の證據には昔運動會のあとで永野さんと接觸して並んで立つただけの快感が今に忘れられないのではないか、と思ふと今度はもう自分は生涯眞の靈肉一致の佳境を知る事が出來ないのだといふ自己を哀れむ淋しい情に變つて來るのだつた。靈は尊い。靈は尊い。靈の伴なはぬ所には苦痛が伴ふのみだ。それを思ふとたゞ苟めの愛にせよ達子を精神的に愛敬して呉れた人は有り難い。達子は知らず識らず其の人達の未來の幸福を殺ぎはしなかつたらうか?T先生、金井さん、杉永さんはどんなに暮して居られるだらう?色んな問題を持つて來て居た靑山さんは?病氣の時花をあげたら喜んだ瀨川さんは?妹の樣に扱つて呉れて居た大兄さんの仲よしの大山さんは?とそんな人達の事まで思ひ出されるが、却つて達子が輕い戀を感じたI先生だの病院の副醫長だのとい

ふ人の事は露はども思ひ出さなかつた。永野さんだけは別として。

こんな事を考へながら長い道中を恙なく辿りついて達子は安着の報を良人に出した。良人からも其の後は毎日葉書か手紙か缺がさず來た。達子はそれを受取る度に嬉しくない事もないが、昔入營中の永野さんから貰つて居た時の嬉しさに比べると同日の比でない事が思はれて、覺悟の上とはいふものの、そこに一種の苦痛が生れずには居なかつた。「何故もつと喜ばないのだ。永野さんのは頻摺したり抱きしめたりして居たではないか」といふ苦みが。

百四十一

達子は今まで儉約々々といつて何一つこしらへて居なかつたので、夏休まで學校を勤める傍ら衣類や夜具を新調した。お休になると其れ等のものや、書物や調度をまとめにかかつた。永野先生の手紙で作つた觀世撚や寫眞の紙ニチャもお倉の箪笥の抽出の底から出て來た。それ等をどうしようかと思つたが、まさか昔の戀の思出ぐさを嫁入先まで持ち込まれるものではなかつた。「捨てよう〳〵さつぱりと生れ變らう」最後の頻摺をして寫眞のニチャは火に投じた。觀世撚の方は思出の種といふ精神的の價値を捨て去つて、只の觀世撚と思つて紙の原料並に紙を作つた人の勞力を尊重し、辛抱に撚つた達子の骨折に價値を置いて徒に灰にせずに役に立てたけ役に立てる。それは永野さんに對する愛でなくて紙撚に對する愛だ。良人に對してこれから築かうとする愛に何等の抵觸もしない筈だ。さう思つてフッ〳〵と切つては荷造りに使用した。懷中日誌が幾つも幾つもゴロ〳〵と出て來た。一月十五日から十九日あたりを見ると毎年の日誌に何か思出が書いてあつた。文字の書いてない處には松の木と門との繪が書いてあつた。人力車の繪があつた。圖書室に上つて行く階段の繪もあつた。「今日は一月十九日だ」とたゞそれだけ書いた日誌もあつた。でも忘れて過した年はないらしかつた。達子はメリ〳〵と其れ等を引き破つた。新らしい良人に見られるのが恐ろしくてはない。どうかしてさつぱりと古傷を癒して新らしい愛を作つて見たいと思ふからだ。良人に對しても勿論すまないが自分の決意に對してもすまないからだ。こんなにして倉の中は奇麗さつぱりと整理がついて、もう大兄さん夫姉の荷物が

何時到着してもかまはない樣に空間が作られた。無限大の空間の一小部分をでも塡充するにそれ〳〵義がある。達子の荷物はこれから汽車に乘り汽船にのり又汽車に乘りして遠い所に行つて、大木で掩はれた大きな倉の中の空間を塡充するのが義だ。この倉から去らなければならないのは一種の悲みだが、義に遵つて位置をかへるのだと思へば大自然の統一を贊け、自ら從順に整理せられる氣味のよさも味はれるのだつた。

達子は荷物を運送店に托するとホットしたが、まだ暇乞に知人の宅を廻らねばならなかつた。行く先で歡びを云はれると引導を渡される樣に思はれ、贐を貰ふと香奠を供へられた樣な氣がしもするが、でも悲しくはなかつた。死即生で、生即死だ。大宇宙は死につつある、そして生れつつある。際限なく變じながら、しかも常住不斷で所謂不垢不淨不增不減也だ。勿論喜でも悲でもないが、又喜でもあり悲でもあり、喜悲は同一なのだ。而して達子は嫁入したもせぬも同じいのだ。などゝそんな事を考へながら達子は家から家へと歩きに歩いた。

金井と標札のかゝつて居る格子戸をガラリとあけて案内を乞うた。高等工業を卒業した後東京の某會社に勤めて居た金井さんは、丁度其頃休暇を貰つて歸つて來て居た。久濶の挨拶をして其の後の安否をとふと、金井さんは丸い顏に靨を浮べて一昔前達子の視野の中でして居た通りに肩を持ち上げ首を縮めて、「鷄の樣なものです丈夫でよく繁殖しますフッフッフ」と云ふのだ。「お幾人？」と達子も莞爾としながら聞いて見ると、上目を使つて指を四本出して見せて「四羽ヒョコがピー〳〵云つて居ます」と自分ながらあきれたと云ふ樣な表情をして次第に恥ぢらつた樣な顏つきに變へて行つた。「オヤもう四人？御繁昌結構ですわ、私も少し延引ながらこれから鷄になりますのよ、どうぞまあ宜敷くホ、、、」といつたが金井さんと自分と二人ながらが哀に思へて暫く默つた。金井さんも默つた。そして達子が去るまで決して歡は云はなかつた。

達子は其の日隨分多くの家數を歩いたが、永野さんの宅へは立ち寄らなかつた。門前を通つて他所ながら松の木と二階の窓と中庭の雛菊とだけに別れを告げたのみだつた。

いとせめて絶たんと思へど小田巻の
糸の絶てなく十年經しかも。

賤が繰る小田巻のいと思ひたち
覺束なくも出るたびぢかな。
君が庭に咲けよ雛菊さらば〳〵
われにかはりて咲けよ雛菊。
などと心で云つて見た。
昨日まで心ゆくほど見し松も
人妻となれば心おかれつ。
と達子は顧みたい心を抑へて足をも止めず行過ぎてしまつた。
家に歸ると良人から手紙が來て居た。「子供が肺炎になつた。お前はわしと苦樂を俱にして呉れるだらうと信ずる。片時も早く來てくれないか」と書いてあつた。達子は二三日疲れを休めて立ちたかつたが、もうそれ所でない事になつて來た。ねむいだの腹工合が惡いだのといつては居られない。すぐと自動車會社にかけつけた。そして、乘合せた醫者に肺炎の看護法を聞いたり其の他の人に經驗談をきいたりしつつ一刻も早くつかうと急いだ。

百四十二

何分にも長い旅路であるので達子は翌日の午過にやつと行きついたが思つたよりも病人はよかつた。でも姑も老病で寢て居るので人手は幾らあつても引き足らないのだつた。達子は其の日から子供の看病につききつたのだ。先妻の亡靈からも賴まれて居る。命がけで世話をしよう。死に場所と時とを索して居る達子には惠まれたる仕事かも知れない。でも鼎の足が折れて公の餗が覆りはしないだらうか？と心配な事は非常に心配だつた。
子供の枕もとの襖には藥をのませたり食事をさせたりする時間と檢溫器をかける時間とが表示せられて居た。それを見ると晝夜を通じて二時間置に藥をのませる事になつて居る。
「オヤ〳〵」と思つて藥を見ると散藥と水藥と二種あるきりでいづれも一日三回分服としてある。それでは六回ぢやないか十二回になる筈がないと恐る〳〵良人にきくと「一回分を二回に分けてのませるのだ。それの方が體の爲によがらうと思ふから」との事だ。「病人も看護人も寢る隙はないぞ、其れには氷もかへねばならず濕布を取りかへねばならず、

小用をとらねばならず、檢温器をかけねばならずするから」と思つたがそれはやむを得ぬ事で、覺悟して取りかゝらなければならぬ事だつた。其の夜の事だ。せめて檢温器をかけ乍時間をなりと子供の夢を破らずにすまさう、いくら晝夜寢て居る病人だと云つて夜二時間毎に呼び起されてはたまるまいからと思つて、ソッと檢温器を腋の下に挾ませたが十分たつて出して見ても少しも上つて居ない。これは濕布が邪魔になつたのだらうか、それとも痩せて居るからだらうかと今度は今かけた方でない側の腋の下に挾ませたがやはり上らない。それぢや股間にして見ようとソーッと股のつけ根をさぐつて挾ませた。それだけの事をするのにでもどれだけか心を配つてしたのだつたが、こんどは正確に量り得た。子供の目もさめずにすんだ樣だつた。もう今すぐ夜はあけさうだが一時間位寢られるかも知れないと次の間の寢床にはいつたが中々すぐには寢つかれない。考へなくてもよい事をも考へたり寢過ぎはしないだらうかなどと心配して神經が過敏になるのみだ。

暫くするとソロリッと子供の部屋に忍んで來る人の足音が聞ねてフシャ〳〵と小聲の話聲が始まつた。今さきまで寢て居た筈だつた子供の聲で「わしが寢とる間に殺さうとでも思うたのか睾丸を摘みに來た……」と云つた樣に達子の耳には聞こゑた。と同時に總身がジーンとした。其次の聲は姉さんだつた。「そんな事があるもんかなホ、、、」といつた樣だつた。それでやつと固かつた達子の體は軟かになつた。でも涙が溢れた。「ア、今のは私の僻耳々々何といふ曲つた私の心だらう？何であの子がそんな嫌な邪推をするものか。昨日もサイダーが多すぎるから半分飲んでへして呉れといつてコップを私に出した位な無邪氣な子だもの」と思ひ返したが不快さはどこかにへばりついて退かなかつた。「惡い惡いこれが繼母と繼子との隔たる動機だ。今が大切だ。誤解させてはならない。してはならない。肉體に觸れれば生さぬ仲でも愛が生じるといふから大いに實驗して見よう。病氣であるといふ事は思ひ樣ではよい事かも知れない。きつとあの子を愛して見よう。あの子にも愛させて見よう。それが自分とあの子とに勝つ事だ。大なる勝利で大なる創造だ。必ず期して成功しよう」と思ふとやつと落付いた氣になつて睡られ出した。夜があけると又一日枕許につきつて居たが、一寸そこを起つてほかへ行くとすぐ「勝ちやーん」といつて病人は自分の從姉を呼んで尿瓶を持つて來させた。姉さんがそれをきゝつけて「何故お母

ちやんに云はないの？」といふと「お母ちやんは『小用が出はせんか』と云つて問うて呉れないのだもの」と云つて居る。達子は又「ハッ」と思はなければならなかつた。「可愛想に遠慮をして居るのだ、私の氣のきかない事。本氣で世話するつもりでも行きどゞかないものだな」と自分で感心した。尿瓶の後始末をして又枕許にチンと座つて居ると、良人が「一寸散髪に行つて來るぞ」と云つて座敷から出て來た。「ハイ」といつて達子はやはりぢつと坐つて居た。姉さんが「タオルを出しておあげ、それから小錢があるか財布を見ておあげ、十五錢だから」と氣をつけて下すつた。今まで男の世話をした事のない達子は驚いた。「面倒なものだな」と思つてタオルを探し出して持つて來ると良人は一寸さはつて見て「これは濕つとるぢやないか」と云つた。ほんにさう云はれると少し濕つて居た。大あわてをして乾いたタオルを探して來た。そして渡して、今度こそは氣をきかさうと良人の着物の衿の折れて居るのを直して襦袢の袖が長短かに袖口にのぞいて居るのを引つ張つてよくした。そしてフト子供を見ると其の目は曇つて涙がキラと光つて居た。「惡かつた」と思つたがもう仕方がなかつた。達子は大兄さんが嫁を貰つた時の自分の心持を思ひ出した。それは喜ばねばならぬ事であるのに悲しかつた。大兄さんを取られてしまつた樣な氣がして泣きたかつた。披露宴に列席するのがつらくて、休暇がすまないのに學校へ行つてしまつたのだつたが、今此の子もお父さんを取られて一人ぼつちにされた樣な氣がしたのではなかつたらうか？　目の前で着物を引つ張つたり撫でたりしたのは罪だつた。と涙ぐましい氣がしてぼんやりして居ると姉さんが又「下駄を見ておあげ」と注意して下すつた。「ああさうだつたか、又間が抜けた」と思つて走り出て下駄を揃へて「いつて被入い」とお辭儀をした。

暫らくして凉しげな頭になつて歸つて來た良人は機嫌よげに子供の所に來て坐つて「どうぢや少しはよいか、留守の間に梨でもむいで貰つたか？」といひつゝ子供の額に手をあてた。達子は又「ハッ」と胸をつかれねばならなかつた。梨はむいでやりはしなかつたのだから。「ほんに何といふ行き屆かない自分だらう？まるで馬鹿見た樣なものだな」と、ほと〳〵あきれてしまはなければならなかつた。

失敗や不行屆を一日に何度かしつつ其の度に愛情の發表方法を覺ゑ、科(あな)に盈ちて進むといふ其の科を知り、目に見ゑぬほどづつではあるが達子は修養の出來るのが自分にも知られた。考へて見ると自分は十五年學校教育をうけたのだつたが家持をするのにどれだけ足しになるだらう？と思ふと全く心細い感じがせぬわけにゆかぬ。學校がもし根幹となる信念を得作らないならば學校の價値は零だ。女の子は下女か小間使かにやり、實地について修業を積ませれば其の方が早道だと痛切に感ぜられるのだつた。

此の樣にして一日一日とたつうちに子供は次第に達子に馴れて來た。達子の愛情も濃くなつて行くのが知られた。病氣も日增によくなつた。此の方は成功し得るといふ曙光が見ゑた樣に思はれたが、一方良人との仲は暗黑さが深まつて行きはしないかと虞れぬわけに行かなかつた。それは達子が來てから五日目、先妻の命日の事だつた。良人が墓參した。達子も後から詣つた。何十基も列んで居る石塔の中の最も新らしい一つのに水を供へ線香を

燒き其の前に蹲まつて、「どうか貴女の後が完全につげます樣に冥土からお守り下さいませ、美男ちやんの病氣もなほる樣に力をそへて下さい」と祈つて立つ上ると、つひ隣りの大きい石塔の影に何やら動く樣だつたので目をとめて見ると、それは幽靈でも何でもなくて良人の置忘れた麥藁帽子が卒塔婆に被られて、風が吹く度に飛ばうかどうしようかと考へて居たのだつた。達子は一句ありたい樣な氣がしたが生憎句は出なかつた。それでも何か諧謔の種にせねばならない樣な心持がそそられるので、ニコ〳〵しながら其の帽子をとつて袂で隱して宅へ持つて歸つた。まだ遠慮にはあるけれども、それでも大分心易くなつたから一つおどけて見ようと達子は良人の書見して居る所へソッと行つた。

達「只今歸りました。貴夫よいお土產をあげませうか？何か當てて御覽なさい、それはほんとに珍らしい御土產ですのよ」

と事務室で同僚とおどけ合つて居た時の樣な心持でさう云つた。所が豫期にはづれて良人は却つて不快さうな顏色をして「ア、帽子を忘れとつたか、わしは若い時にはそんなでもなかつたのに此頃はよく忘れてどうもならんのぢや、これから後も何度も忘れ事をするぢ

やらうからさう思つて居てくれ」といつて再び目を本の方へ向けてしまつた。達子は興がさめてしまつた。「まあもつとは面白く話せるのかと思へば、ほんとに二人は十も歳が違つて居るのだから仕方がない。私が子供すぎてあの人はぢぢ臭すぎる」と淋しい氣がして默つて其の部屋を出て子供の側に行つた。そこが達子の一番落着きよい部屋だつた。

其の日は午後にもまた一つ變な事が見つかつた。それは參つてくれた人達にお茶を汲んでお菓子を出すのだつたが、「お煎餅だから菓子箸は入るまい武者小路のお茶の湯では干菓子には箸をつけないのだから」と達子は天晴應用の才を働かせたつもりで——一つには菓子箸の有り場を知らなかつたから——菓子器に盛つたお煎を二三人のお客の前に出して退く拍子にチラと良人の顔を見ると、朝見たよりはもつと恐ろしい顔をして、額には疳癪筋が浮いて居るのだつた。「まあけうと、お箸が無かつたからだらうか？何か他に理由があるのだらうか？」とオド〳〵して居ると、出入りの人が氣を利かせてお箸を持つて行つて呉れたのだつた。それが良人の不機嫌な顔の見始めで、それから後といふものは殆ど不機嫌な顔を見ない日がない事になつてしまつた。

先妻の命日の翌日から豫て老病だつた姑の様子が急に變つて其の次の日にはとう〳〵なくなられた、「息子が百まで生きます様に、孫の病氣がよくなつて百まで生きます様に、今度貰ひました嫁が百まで生きます様に」と清正公様を祈りつゝ。さあさうなると家の中は引つくり返る程の大騒動だ。處が今度貰つたお嫁さんはさつぱり木偶の坊で何の役にも立たない、邪魔になる位が關の山だ。良人はそれがもどかしくて人にも恥かしく思はれるのだらう、一日のうちに何度か額の筋が浮いたり消えたり時にはそれが聲になつて出て來たりするのだつた。「何と云ふ仕方のない馬鹿見た様な者だらう。もうお題目が始まつとるぢやないか。他人の人がお題目をあげて下さるのに宅の者がゆるゆると風呂に入つて居たりして何の事だ」今やつとお臺所の手があいて風呂へはいつたばかりの達子はすぐに飛び出た。「ほんとに私は何故こんなに馬鹿なのだらう、手にふいのだらう、つく〴〵自分の手を見ても足を見ても人より構造が異つて居る様にもないが」と思ひつゝ。

こんな調子に毎日不調法を達子はしたが、又一度よくなつて居た子供の病氣が祖母の死の混雜によつて再び惡くなつたといふ事が一層良人の氣分をいら〳〵させて、不機嫌に不機

嫌にするのでもあつた。子供は遂に肺炎から肋膜炎となり「腸チブスになるのではなからうか」などと云ひつゝ長引いておしまひに結核となつたのだつた。其の間の達子の苦勞が未熟な筆で書ききれようか。如何に戰場に出たつもりで命がけで働いても人の氣には入らず、寢る隙も食ふ隙も排泄する隙もなくても誰も哀れと云つては呉れず。大戰後で物價は暴騰して會計はやりきれない。睡眠不足が重なれば目もうすくなるし、耳も遠くなるし、舌も荒れて自分の食物がとれぬのみか、加減が判らぬから三度三度甘いとか辛いとか云はれねばならず。さうでなくてさへ物をよく忘れる達子の頭は益々ボーッとしてしまつて言はれた事を何度でも忘れる。お人が見ねても何の用事で誰が來たかすぐ忘れる。あわてまはれば物を蹴轉がしたり、自分も轉んだり、寢て居る人の頭に躓いて平蜘蛛の樣になつて詫びもせねばならなかつたり。手を切るやら着物を濕らすやら緒を切るやら手桶や杓をころがすやらは日に幾度なるやを知らずだ。良人でも見て居ようものなら一層ちちれてキリ〳〵〳〵ッと土間の眞中で獨樂の樣にまはつたりするのだ。さうすると、「さつきから見て居るのに忙しげに走り回るきりで何一つ出來んぢやないか」と窪んだ目から恐ろしい光が出て、額に薩摩薯の筋の樣な筋が浮く、お嫁さんがビーと泣き出す、それでおしまひになるのだ。

百四十四

達子は一日のうちに三度や五度蹴躓いたりコチ當つたりしない事がないので足を見ると、紫色の斑點が濃いのや淡いのや大きいのや小さいのやムラ〳〵と蝦蟇の腹を擴大した樣に出來た。其の氣味惡く醜い事。良人は不思議に思つて醫師の診察を受けさせて呉れた。醫師はカルシユームの不足だと云つて藥をくれた。其れが達子の醫者にかゝた始めで、其次には朝から晩まで起つたり坐つたりし通すので關節といふ關節が、丁度油のきれた機械を無理に運轉する樣にギシ〳〵と云つて痛み出した。夜床の中へはいるともう寢返り一つ出來ない。それでも朝になつて箪笥の鍛や机などにさばりついて起ち上ると、又どうにか動けはするのだつたが、其の時にも醫者にかけて貰つた。しかし醫藥では何日たつてもなほらないので、後には灸をおろして貰つて、良人はそれを毎日するて呉れたのだつた。其の

次に來たのは肋膜炎で、發熱しないから床に一日もつきはしないけれど、胸から脊にかけて何ともへぬ變な痛さがして、呼吸する度にゼリ〳〵と氣味惡い摩擦音が自分に聞こゑるのだつた。其の時にも醫者にもかけて貰ふし、お灸も良人にすゑて貰つたのだつた。

そんな事を一々考へると良人に落度はない。品行が惡いといふではなし、酒を一杯飲むではなし、煙草を一本吸ふではなし、道樂といへば碁道樂位な事で、根まねばならぬ理由は一つもない樣なのに達子は何故か恨めしかつた。憎らしかつた。自分の病氣は凡て良人が拵へたのだとしか思へなかつた。他人へは平氣で電話でもかけ得るのに、良人へは電話で物を云ふのさへ恐ろしく、まして面と向つては一言も云へなくて、用事があれば紙に書いて机の上に置いたり、姉さんから言つて貰つたりした。良人は良人で達子の其の態度が非常に氣にくはなかつた。或日達子に「一寸來い」といふから行つて見ると、「此手紙を讀んで見い」といつて、達子のお父さんから來た手紙を差し付けるので、開いて見ると「何卒不束な娘だから叱つてお使ひ下さい」といふ意味が書いてあつた。良人は云ひ出した。

良「お前が來てからもう四ヶ月以上になるぢやないか。それのに一日だつて面白いとも愉快だとも思はれた日がない。メソ〳〵毎日泣く許りして、わしは泣くのが大嫌ぢや」

さう云はれると達子は又泣かねばならない。

良「それ又泣き出した。今泣くのが嫌ぢやと云ふて居るのに直ぐ泣き出す仕方のないもんぢや。忙しさうに毎日して居てもこれぞといふ目に見ゑた仕事は一つも出來ず、わしに一度ぢやつてお茶を汲んで持つて來た事も、お菓子を一つ持つて來た事も有りはせんぢやないか。今迄前の家内の居た時でもお母さんの居られた時でも、わしが學校から歸つて來ると毎日お茶とお菓子と新聞と、留守の間に來た手紙とをちやんと持つて來て呉れて居た。着物も暖めてあるし、御飯は無論出來て居るし。お前は本當に氣が利かぬ。ゐらさうに胸ばかり張り出して居て何が取り得があるのぢや。今でも見い此の手焙りを、一度火を入れたら何時迄あると思ふんぢや。よい加減な時には炭をつぎに來るがよい。筆ぢやつてわしが使うてこゝに置いておいても一度ぢやつて洗うた事がないぢやないか。居睡して居て蒲團を一つかけて呉れるでなし、雜用ぢやて前には一日二十錢で充分ぢやつたのに此の頃は五十錢でも足らん有樣ぢやないか。まあそんなにメソ〳〵泣く許りせずに炭取なりと持

つて來い」

達子は默つて立ち上つて炭取を持つて來た。

達「本當に相濟みません、これからは氣をつけます。毎日どうも忙がしくて氣が狂ひさうで、一日たてばャレ〳〵と思うのでございます。一生懸命で働いても一日の日がたち兼ねますので」と達子が云ふと、良人一層怒つて、

良「それぢやからいけんと云ふのぢや。そんな一日のがれの誠意のない暮し方をすると云ふ事があるか。全體仕事に追はれるといふのがお前が詰らんからぢや。仕事を追ふ樣でなくてどうする。障子の被れを繕ふ樣な事でも一針でも縫物をする樣な事でも何でも、昨日よりは今日と何か目に見ゐた進歩をせなけりやならん。大した仕事は出來ないにしても」といふのだ。達子は心の中で「それは理想でせうよ　だけど私はそれを實現しようたつてもう此の上はどうにも働けないのだもの。自分の髪も何日結はないやら、火のつきさうな蓬々頭をして顏だつてろくすつぽ洗はず、寢る時間だつてないのをやつと三四時間見出したと思へばそれをさへあの人が蹂躙しに來ておいて、なんぼ嫁だつて生き物ですよ。私が

家事が下手だといふ事は結婚式の時に充分ことわつてある筈ぢやないか。御自分はあの時自分の事は捨てて置いて呉れてよいから他の人によくして呉れと被仰つたのぢやないか。それのにお茶を汲まないだのお菓子を出さないだのとよく云へた事だ。それも『持つて來い』と云つても持つて來ないのなら怒るもよからうけれど、そんな事が一度もあつたのぢやなし、こちらには病人の世話をして居るのだもの、自分でお茶位ほしかつたらお臺所まで飲みに出て來たつてよかりそうなものだ、そんなにわらさうに構へて人手許りとらなくても。全體家の中に上だの下だのと區別を立てて食物に差をつけたりして、男女機會不均等てあるといふ事は不道理だ。男は碁を打つたり浪華節を聞きに行つたりし、女は呼吸する間もない程働いて居てもまだ働きが足らないと云はれねばならぬ。何といふ情けない事だ。物を秘密にすまい、苟且の事をすまいと思つて居ても、叱る人には秘す樣になり、早くせよと云はれると手を拔く樣になるのは自然のなり行きだ。達子は此家に來て大分不誠實になつた」とそんな事を思つて居ると、

良「何をいつも迄もそこに坐つて泣いて許り居るのだ。もうあつちへ行け。それ。今氣を

きかせと云ふたのに、其の炭取をあつちへ持つて行かんか。ほに仕ん方のないもんぢや」と、又叱られねばならないのだつた。

百四十五

達子は良人から叱られる度に心が良人から離れて行くのだつた。良人もそれを知つて居るからだらう、必らず叱つた後では何か呉れるのだ。或は叱らうと思ふ前に何か呉れるかするのだ。それが又達子は甚だ嫌でたまらないのだつた。投げ付けてもやりたい樣に思はれた。丁度先年奉仕的に働きたいといふ考から、女學校教員をやめて鄉里にかへつて小學校の代用教員に出た時郡視學が、「小學校としては出せたけの俸給を出すのだから貴女も力一杯働いてくれ」といつた時と同じ樣な氣持がする。達子を物質の多寡で勤隋の度を變じる人間、物質で自由になる人間と見るのが根本から間違つてゐる。それだけで既に非常な侮辱を受けた樣な氣が達子はするのだ。犬にならば「これをやるからワンと云へ」と云つたつて大した失禮でもあるまいが、それでも心ある犬は口を閉ぢて去るかも知れない。當世では「ワンと云へと仰しやればワンと申します、廻つて來いと被仰れば廻つて來ます、どうぞ肉の大きい切をやつて下さい」といふのが流行の樣だけれど生憎達子にはそんな眞似は出來ない。「人が自分を信用して任せて呉れれば全力を盡してやつて見る。もし自分で出來ねば其の位置を去る」たゞそれだけしか達子は知らない。要求するものが若しあるならばそれは無形の信用であるのだ。そこの飲み込めない郡視學が達子を得使はない樣に良人も亦達子を得扱はないのだつた。だからたまさか機嫌がよくて諧謔るにも「おい一寸來い。これが此の月の小使だ。一月が十六錢六厘六毛だ。前の奥さんは三錢三厘三毛しか得貰はなんだが今度の奥さんはちと上等だで値上げだ。の。それを仕舞つとけ、其の代りいやぢやなどいふたら追出すぞ」とさういつたりする。すると達子は充分おどけだと承知はして居るのだが、其の奥底に眞劍さがへばりついて居る樣で不快で不快でたまらない。「まさか娼妓ぢやあるまいし　高いだの廉いだのといつて金で買はれてたまるものか。妻の義務として生殖の任に當るのは人倫の大本で已むを得ない事だが、金で買はれて快樂を貪る對象にはして貰はないぞ」と思ふのだつた。

良人は叱る事、御する事、與へる事、それを愛の表現だとして居るらしいが、それは何れも達子の嫌な事ばかりだつた。願はくは其の三事を節して達子の心を萎靡せしめない樣に健康を害せしめない樣に、人格を損せしめない樣にと氣をつけて呉れたら、どんなにか愛を感じるだらうにと思はない譯に行かなかつた。

理屈つぽい達子は愛の字の意義を考へた。愛とは、をしむと訓じて、其物の生命並に能力を浪費せしめない樣にし、完全なる生育を遂げ全能力を遺憾なく發揮せしむることを云ふのではなからうか。取レ之以テシテ時。使レ之以テステ時。と解してあつたのをどこかで見た樣だ。梅田さんの義兄さんの樣に妻を殺すのをどうして愛だと云はれようか。我儘の極だ。殘忍の極だ。天地の化育に參し所か、全滅を欲するのだ。一統を大にするのでなくて、自己が統一しようといふ謀反的行爲だ。達子のお父さんは有りとある何物をでも愛される。朝は日光を愛んで早く起きられる。顏を洗ふにも水を愛んで金盥の底にちよんぴり入れて顏の洗へる最少限を度とせられる。御飯は缺げた膳椀で健康を保つに適當なる量をとられる、長年の間分量がきまつて居て「おいしいからもう一膳」などと過された事はない。便所へ行け

ばお尻のふける最小限の塵紙を消費せられる。時間を愛んで何か手足でも心でも働かせて居られる。人を愛してなるべく人手を借られないし、氣兼や氣苦勞をさせない樣に小言一口も云はれない。その樣な人を見なれて居る達子には人に顏を洗ふ水を汲ませて多いだの少ないのだと小言を云ひ、人に食膳を並べさせて何が出て居るの居ないの椀が剝げて居るの甘いの鹹いのと苦情を言ひ、便所へ行けば紙がまる一枚のはしつこが一寸缺げて居ても使はないといふ樣な人間を見ると不思議で不思議でたまらない。こんな人は塵紙にだつて謀反を起される相がある。「尻をふくのはお前の責ぢやないか」といふ調子に惜しげもなく同情もなく使ひ散らかすと、塵紙だつて此の樣な人には使はれたくないといふ氣になつて逃げ出してしまふにきまつて居る。其れに反して「これも天道樣の下されもの人樣の御勞力の集りだ、私の尻を拭いては勿體ないがまあ又私も何かお役に立つ仕事を代りに政しますから我慢して下さい」と二つに裂く物は三つにも四つにも裂いて拭き得る最小の量で拭かうとするならば、紙は「どうぞ御遠慮なしにお用ゐ下さい私は喜んで貴郎の御用に立ちまする」といふのだ。「何で馬鹿な紙が物を云つたりするものか」と人は笑ふかしれな

いが愛して見れば聲が聞ゐる。愛さねば聲が聞ゐないのだ。其の聲が聞ゐ出したら其の物と仲よしになれて今まで知らぬ別な天地に出られるのだ。福祿壽が期せずして聚まつて心がいつも滿ち足らふのだ。征服と被征服との樣な不安に滿ちた關係で周圍と結びついて、被征服者から絶ゐない呪を捧げられて居て何で福や祿が集まらうか、壽(いのちなが)い事が出來ようか、一寸見てゟ貧相と短命相とが現はれる事を免れないのだ。先妻が死んで行つた樣に後妻も死んで行き、子供も死んで行き、倉も田畑も飛んで逃げ、鉢や皿まで壞れるか羽が生へるかして、此家は伽藍堂となり、狐か狸かの住家に變りはすまいかと、繪卷物でも見る樣に淋れて行く樣があり〳〵と達子の目にちらづいてならぬ。

しかしこれは人の事だ。人はどう有らうが達子は自分で自分の城を崩してはならない。磨きの手を弛めてはならない。昔永野さんへは賴まれなくても自分から汲みたくて、人に氣兼をしながらお茶を汲んであげて居たではないか。賴まれなくても、そつと煙草盆や硯箱の掃除をして上げて居たではないか。石ころ一つを永野さんがお千代さんに遣りなすつのが羨ましくて自分に貰ひたかつたではないか。何故今良人に對してあの樣な氣になれないのだ。勞力を惜んだり貰ふ事を嫌がつたりするのだ。さう思つて來ると今度はぐつと行きつまるのだつだ。

百四十六

さしもに執念深かつた病魔も人間との根氣較べに多少たぢろく色を見せて、半年の後には子供も床に起きて坐つて繪を書いたり又寢ころんだりする位になつた。もう其の頃は達子に馴れきつて御飯をたべる間でも自分の左手で達子の左手を握つて居らねば食べない。そして達子は右手で御飯を口に哺ませてやり、子供は右手で書物を見るのだ。口に持つて行き方が早いと初め口に入れたものを舌の先にのせて出して見せる。おいしくない物が行くとそこらに吐き散す。お旨しいものが行くと「今のはおいしかつたお母ちやんも食べて見い」といつて食ひさしを達子の口にねじ込まねばきかない。そんなにして食べて居ると少なし二時間は一食にかゝる。其の間女中が其の部屋へはいつてはいけないのだ。御飯かすむと女中が用事をきゝに來るから「何々を買つて來い」とか「銀行へ行つて來い」とかい

ふ。それをでも台所へ達子が出て行つて長々と下女に命じたりして居ると「下女とばかり話をしてわしと話をせぬ」と云つて怒り出す。下女が町へ出て行くのが大抵朝の十一時から十一時半位になる。女中は近所隣の用事きいてあげて自分のうちへ歸り、小さい兒を負ぶつて買物をして歩き又自分の家に立ちよつて子供を返し、近所へ用事の結果を屆けていて知らぬ顔をして達子の所へ「只今歸りました。銀行で手間取りまして」などと云つて歸つて來るのだ。だから早くて一時遲い時には二時近くになる。其の留守の間達子は病室から一寸も出られない。繪を書けば其手傳をせねばならず。粘土細工を手傳はされたり、寫眞燒を手傳はされたり、便所へ行けばお供をして行つて戸の外で立つて居らねばならなかつりするのだ。達子の方が便所へ行けば子供が迎へに來て戸の外で立つし、一寸の間を拔けて髪でも結はうものなら大へんな權幕でやつて來て、髪結道具を一切かつ潔へて持つて行つて自分の枕許で結はせねばきかない。倉へ行けば倉へ迎へに來る。十五にも六にもなつても駄々つ子の通りに甘へたりむつがつたりしてほんとに一刻も離して呉れない。女中がやつと歸つて來て呉れるとそれから買つて來たものを料理して又お晝をたべさせかけるのだが、それが二時にならうと二時半にならうと、子供より先にお母さんや女中は決して御飯をたべてはならない。それを強ひてたべようものなら「こりや畜生」といふいきまでどんな罰當りが來るか判らないのだ。だから罰があたるよりは三時半か四時頃まで少々お腹のすくのを辛抱して居る方が納りがよい。そこで自分のお腹はそれでよいとしても、四時か四時半から獨樂舞のキリ〳〵を始めても良人の歸りの五時までに御飯が間に合はない。つづいて朝から辨當持で出て居た姉さんも姉さんの娘も歸つて來るのに、空いた腹を早速滿たしてあげるべく何も出來て居ないといふ事になつて險呑な低氣壓が襲來するといふ順序になるのだが、達子は如何に其の子供の我儘に困つても嫁入つて來た當分に誤解せられたり遠慮せられたりした時よりはよほど心持がよかつた。「勝ちやんの顔をそつてやつて、わしの顔を剃つて呉れぬといふ事があるか、頭までクリ坊主〳〵に剃つて呉れ」と云つてきかなかつたり、「をばちやんの教授細目をしてやつたり月末統計をしてやつたりして、わしに本を讀んで呉れぬといふ事があるか」といつて飛びついて來て書いて居る細目を破つたり、嫉妬深いので困りもしたがそれがまた可愛くもあつた。達子は「せめて此

の子に對する位の情が良人に對しても生じて來たら」と何度思つたか判らない。

子供の病氣がよくなるにつれて達子の病氣は進むらしく、肋骨がいやな程手に觸り出して少々の勞働にしんどさを增して來たが、「今私が實家へ休みにやらせて貰つたら此の子の病氣はすぐに後戻りするから、まあも少し、まあも少し」と辛抱の出來たけ辛抱をしたのだつた。身體がかなり丈夫な間は精神も健かで理性の安全瓣が大抵ならうまく調子をとつて行つて呉れるが、體の衰弱が烈しくなると安全瓣は機能を失つてしまつて狂亂の狀を呈して來る、達子も次第に氣狂じみて來た。

陽氣がめぐつてお庭の梅もホロ〳〵散り出し隣の爺さんが日向へ莚を敷いて日向ぼつこをしたりする樣な時が來ると、今までうちでばかり遊んで居た子供も寫眞器を持つて外へ出て見たりする樣になつた。達子はやれ〳〵と大きくなつた樣に思つて、子供の蒲團を日向へ干したり打ち拂をかけてまはつたり、山の樣に積んだ本や遊び道具を片付けたり、鬼の留守間ではないけれど洗濯したりするのだつた。さてそこまでは大變結構だが一寸調子が狂ふと何の目的なしに無やみと廣い家中を飛び回つたり跳ねまはつたりしたくなる。「あ、嬉しい〳〵今は良人も子供も姉さんも姪も女中も留守だ。私が一人だ。ああ嬉しい嬉しい。自由だ自由だ。こんな廣い天地があるに何故箱の中に這入つて居らねばならないのだ。走れ走れ。大手を廣げてやれ。こんな物は踏み蹂つてやれ。足袋なんかは投げ〳〵。あいつの書いた字だ憎らしい爪彈きしてやれ。この姑土細工はあんまりよく似すぎとる。美男ちやんがお父さんだといつてこしらへたのだ。にらみ付けてやれ。こら目尻がさける程にらんでやるぞ。何で私を鉋で削る樣な事をするのだ。痩馬に鞭をあてる樣な事をするのだ。機械だつて油もささずに夜晝運轉し通したら碎けるわい。私が死んだら取りついてやるぞ。なんぼ鷄だつて犬死にしたくない位な慾はある。ハ、、、、鷄がなんで犬死しようたつて出來るもんかハ、、、、鷄は鷄死だつたハ、、、、鷄ならつぶしがきくが此の達子が此のまま病氣が惡くなつて死んだつて何の役に立たうか。ああつまらない。大聲をあげて泣きたいなあ。地だんだ踏んでやらうか。私の仕事はまだ殘つてる。まだ〳〵殘つてる。讀みも書きもしないでは死なれない。何だか書けといふ使命が私には殘つて居る。それは何か知らないけれど書かねばならないのだ。此の腕が鳴つて居る。お竈の前でキリ〳〵舞を

して死にたくはない。誰も喜んでも呉れないのに。馬鹿らしい、これだけの勞力を費せばもつと何か出來よう。お嫁さんは廢業しようかしら、ノラだつたら來もしなかつたらうがとうの昔に去つて居る。ノラが賢くて達子は馬鹿だ。もう意地つ張りはやめてノラに降參して冑を脱がうかしら、Bさんぢやないが荷物も何も入つた事ぢやない、此のまま飛び出してやらうか。死なれた雨江先生の御筆の加はつた和文和歌とお父さんの筆のは入つた漢文漢詩とそれだけ持つて、さうだ」

草稿を出して來て達子は包みかけた。「ああ此の朱の色！お父さんの靈が嚴ごして見ゐる！どうしよう？どうしよう？私の考はやつぱり惡いのかな。西洋人の思想に負けなとお父さんは被仰る。大姉さんや中姉さん達の事を考へよと被仰る。お前は一度教育者ではなかつたか、終生人の模範になる行をせねばならぬぞ、輕々しい事をすなと被仰る。やつぱり私の忍耐が足らないのかな。ほんに私は何百人かの生徒を教へて居る。たとひ教員はやめてもそれ等の生徒の視線は集まつて居る筈だ。實行で率ゐねばならないのだつた。達子が迷へば彼等も迷ふ。日本は騒動だ。人類は大騒動だ。何が騒動だといつて女性の同盟罷業位世に大騒動があらうか。まてまてもつと考へなければならぬ。ねばり強く工夫し研究する筈だつた」

そこまで來るとやつと達子は狂態から正體に復して、散らばつた坐蒲團や足袋をもとの處に戻し、草稿を片付けて、襷をかけて臺所に走り、笑顔をして良人の歸りを迎へるのだつた。

百四十七

達子は自分の事を世の人が「繼母だから子供を丈夫に得しないのだらう」とか「生さぬ仲だから子供が病氣でも神佛に祈らない」とか評して呉れるのをより〳〵聞くが、それは少しも悲しいとも口惜しいとも思はなかつた。眞心を以つて看病して居る事が事實であるから。それよりも人は何とも云はなくても、良人に對して衷心から忠であり得ないといふ事が一番悲しく苦しい事だつた。憎らしいといふ感情と憎んではならぬといふ理性とは日に夜に睨み合つて、達子に寸分の安息をも與へて呉れず二つの齒車で肉を引き裂かれる樣な

思ひを達子はせねばならなかつた。これが一層の事二重人格であつて呉れるなら、一方の人格が他方の人格の存在を知らなくてすむのだから矛盾の苦みだけでもなくて、苦みが一重ですむだらうに、ああどうかして血路を開いて苦の包圍から遁れたいものだと思ふが、でも又これが眞の自己で、此の如くないのは眞の自己ではない樣な氣もするのだつた。

「まあよい、まあよい、私は食べて行けないからいや〳〵ながら嫁に來たのではない。女性といふ天賦を充塞させたい爲と、かく身を處するが義だと信じたから來たのだ。食べられる爲だつたらどんなにそれがいぢらしく見すぼらしく哀れだらう、世にはそんな女性が澤山あるのだ。自覺して飛び込んだ火の中だ。男子が自覺の上で砲煙彈雨の中に立つのも同じだ。八重子さん達の遊戯とは趣が違ふが、要するに達子の苦勞も遊戯三昧だ」さう思つて來るのが覺束ななからの最後の統一だつた。

常ならば夢の間にたつ一年が、其の年は三年も四年もの長さがあつた樣に思はれた。やつと第一回の結婚記念日がめぐつて來て家の外は單衣一枚でも暑い頃になつた。病氣の子供は大分よくなつて遠い池へ魚釣に出かけたり、お父さんの自轉車を内證で持ち出して乘る稽古をしたりして、九月からは學校へ行くといつて自分できばつて居た。達子は衰へきつた體を休めるべく二週間の暇を貰つて實家に逗留に行かせて貰ふ事にした。

さて中途の汽車と汽船との内は無事だつたが、最後の乘物の自動車に乘ると、ぐたりと達子の氣が弛んでしまつた。前につきのめる程の睡さをどうにも仕方なくグラ〳〵しながら崩れる樣に父母の家に這入つたが、もうそれなり寢込んでしまつて晝やら夜やら判らないで、物もろく〳〵食べずに六日の間熟睡した。七日目にやゝ寢が足つたと思ふと苦しさを覺ねて鮮血を吐いた。クルップ氏肺炎と右腕の結締織炎と頭の丹毒性瘍とが同時に見舞つて來たのだ。易の刑剧凶(フミナヒコロナル)が實際になつたのだ。

ますらをに我とわが身をたぐへつゝ
たふるゝまでも戰ひしはや

と思へば豫ての望みだといふ會心の笑も洩される氣もしたり、又

なまじいに物のことわり知りしかば
血を吐くまでも苦しみてけり

といふ多少の馬鹿らしさをも感じた。しかし凡てを詩にしてしまふことは出來なかつた。肉體の苦しみにも攻められるが、それよりも烈しく苦しめに來るのは一年間の思ひ出だつた。どうにかかうにか、堪へて來た其の當時よりも十層苦しいものになつて達子の頭の中を掻きむしり、引き裂き、燒き盡さうとするのだつた。はげしい憎惡と怨恨とが潮の樣に遠鳴をしてよせて來る。と忽ち嚴にぶつかつてしぶきを散らし、ゴゴーッと物凄い音がする。それは「何故そんな醜い憎惡や怨恨に滿ちながら從順に一言の口返事もせず貞女らしい振をして來たのだ。これからもしまうとするのだ。僞の生活が何時まで續くと思ふ打ち碎いてしまへ」と云ふ聲なのだ。達子の體は天井につく程上へ〳〵〳〵持ち上げられてはドスンと奈落の底まで落される。火の樣に怒つた良人の顏が、鋭どい目をして達子の顏の近くへ〳〵よつて來る。恐ろしさに聲を立てようと思つても聲が出ないで咳が出る、そんな時はきつと血啖だ。「氷枕々々」と町中の藥屋を夜中にさがしまはつて、やつと買ひ求めて、氷囊と兩方で冷しぬいて貰つても中々此の頭の底を冷しきる事は出來ない。又してもう〳〵色んな幻覺やら妄想らやに苦しめられねばならないのだつた。「あゝ苦しい〳〵どこまで追擊するのだ、親の懷まで逃げ込んで居てもまだ來るのか。親の愛と良人の愛とは似てもつかぬものだつた。達子は親の愛に歸りたい」とさう思はずには居られなかつた。

周圍の人も殆ど皆離婚をせよと云つた。たゞお父さんだけは默つて居られる。達子は其の沈默と同じ物が達子の頭の中にもある事を知つて居る。そしてそれが一番尊いものだ。迷つてそれを外のボロクソと交ぜこせにしてはならないぞ」といふ樣な感じもせられる。

肺炎だつた達子はとう〳〵結核になつて二週間の豫定の逗留は三年になつた。

良人は學校の休暇毎に遠路を物ともせず寒くても暑くても、時間の都合で自動車がない時は七里の道を夜通し歩いてでも達子の所へ見舞に來て呉れて有らん限りの愛の發表をしようと、自分から離れて行く達子の心を取り戻さうとするのだつた。それのに達子はそれが又嫌だつた。抱擁せられながら白眼んだ。撫でられながら恨んだ。「こんなに病氣して居るのにまだ生殖せよと云ふのか？わづかに一二分繋がつて居る命からまだ快感をしぼり取らうとするのか？達子の生命が十圓では高いといふのか？憎らしい人殺しめ。自分も負けぬ樣に弄んでやるぞ」と達子は良人の顏や頭を撫でまはしたり紐を引張つたりした。それで

大分胸がスッとした。それでも良人が見舞ふ度に折角忘れかけて居た憎悪は新らしくせられ、衰へかけて居た病勢は盛り返し盛り返しするのだつた。歸つて行つた良人からは「わしか見舞ふ度に前よりは病氣がよくなつて居るし、わしを好きになつて呉れるらしい、それを大變喜んで居る。何でも早くよくなつて歸つて小作米の受取だけをでもして呉れ」といふ手紙が來る。達子は欺されて居る良人が氣の毒にも思はれるが、少しよくなればすぐから使はうとする心根が又惡らしく思はれねばならないのだつた。

百四十八

「あゝ私はどうしてこんなに良人が憎らしいのだらう？始め永野さんに戀したのが今になるまで此の樣に響影するのだらうか？もう十一二年文通もせず、すつかり思ひきつて諦めて居る人ぢやないか、事によつたら今たとひ永野さんから緣談を申し込まれても、達子の頭は横に振られるかも知れない位ぢやないか、それがどうして此の樣に影響しようか。やつぱり他に原因があるにちがひない。Yさんの義兄さんは家庭の所夫としてよい人だつたさうな、そして學校生活を長くした者は炊事が下手なといふ事を理解して居る人だつた。其の人を振つた罰だらうか？T先生や金井さんや杉永さんを失戀させた罰だらうか？でもまさかそんな事もあるまい。どちらが影響が有りさうなかと思へばやつぱり永野さんの方の樣だ。數日前に良人が少し體の工合が惡いと云つて來て以後は達子は毎朝西南の良人の方角に向つて精神統一をして口の中で三十回『なほります樣に』と唱へるのを常として居るが、それが終ると何だか永野さんに對して濟まない惡事をした樣な氣がして來る。それで西方の永野さんの家の方に向つて一寸輕い默禮をする、すると今度は良人に對して濟まない事をした樣な氣持がして再び西南に向つて合掌する。あれが僞らない自分ぢやないか。して見ると全く永野さんが影響せぬとも云はれない樣だ。そんならばどうしたら其の原因を去つて憎惡を變じて愛好にする事が出來るだらうか？永野さんと良人とを一つの物にしてしまふと云ふ事が出來るだらうか？いくら考へてもそれは不可能な無理な註文であるとしか思はれない。まあまあもつと考へよう。事によつたら有りとある夫婦は皆憎み合つて居るのかも知れない。諸冊二尊だつて大喧嘩をして居られる。大日靈貴神でも素盞

鳴尊と非常な爭をなされた。達子が萬一永野さんと夫婦になつて居るとしても此の憎しみが湧いて居るのかもそれは知れない。して見るとそれは種の保存の本能と自己保存の本能との矛盾が變形して憎となつたので、人類始まりたつての大昔から植ゑ付けられた因業であると云はねばなるまい。達子が如何にもがいたつて工夫したつて研究したつて拔き去る事は出來ないのだ。諦めよう諦めよう。賢を賢として色に易ふと云ふ樣に道を道として色に易へよう」

達子は靜臥しながらそんな事を考へた。「自分の爲に死んで呉れ」といふ良人の愛と「自分が身代りになつて死んでやるからお前は生きて呉れ」といふ親の愛とが腕較べをして親の方が勝つたと見ゐて、其の頃はやや囘復の曙光が見ゐ出したのだつた。

良人からは相變らず歸れ〳〵と云つて來る。時には「お前の病氣は丁度わしの碁打位なものだ。全く無意義だ」と罵る樣な事も云つて來る。すると今「道を道として色に易へよう」と思つて居た心がすぐ「何だ病氣の療養をして他日壯健になつて働かうと思つて居るのに無意義だといふ事があるものか。丈夫にあつた私をボロクソに使ひ碎いて置いて其の修理をする隙をさへ與へないのか。歸つたらさぞかし早く殺して片付けては貰へるだらうけれど、まあ少し生きて見ませう、何かまだ此の壞れ物の樣な體にでも似合つた仕事があつてより有意義に死なれるかも知れないから」と思ふのだつた。良人の姉妹に達子は繼子の結核を恐れて假病を使つて歸らないのだと思はれて居るらしいのも心苦しいことは心苦しいが、でも仕方がない、思はれるままに思はれて、もつと靜養するより外今の所仕樣がないと達子は思つた。今の所だけぢやない此の先どうしたらよいものだらうか。實際道を道として色に易へようと考へたのは、健康が囘復すると共に元氣付いて來た理性の聲ではあるが、本當にそれが實行出來るものだらうか？偕老は愚十日二十日の同居も此上出來ない事はなからうか？もう到底此の兩人の二人三脚は駄目なものではないかしら。七轉八起と行けばよいけれど、一轉再起さへ出來さうにないのだもの。同穴なんて達子は嫌だ。死んだ後なりといら〳〵云はれずに一人でゆつくり居たいと思はれる位だ。それで夫婦と云はれようか。同棲が出來得ようか。それに苦心して兩親が折角これまで丈夫にして下すつたのに再び前の愚を繰り返してよからうか。再び歸るなら何等か二人の間の愛情並に憎惡に變

化が來て、同居に堪へ易くなつたといふ事實がなくては歸られぬ事はなからうか？とも思はれる。

人々よ笑はば笑へ水の上に
　かつ消えつつも積る白雪

などと負けじ魂を出して愛情の建設を成功して見ようとは思ふのだけれど、命の方が先に切れてしまつては仕方がない。どうしたらよいものだらう？　何かの拍子で憎が愛にはならぬものかしら。可愛さ餘つて憎さが百倍と俗に云ふ位だから。憎さだつて餘れば百倍の可愛さになりさうなものだ。もと〳〵兩極端は一致する筈だもの。とそんな事を達子は間がな隙がな考へるのだつた。

百四十九

達子は日日考へた揚句例の周易を取り出した。一所懸命に精神統一をして、さて筮竹を分つてトつた。漸の封六二鴻漸(ススム)于磐(ニ)飲食衎々、吉。といふのが出た。鴻が水の中から出て來て今磐の上まで上つて居る、これから空に翔らうとして居る象だ。六二柔順中正を以て九五の君に應じ惠賜恩顧を蒙ぶつて和樂する事を得て吉だと云ふのだ。達子の辛抱がひがありさうだ。飲食衎々と云へばこれまでの樣に一緒に食膳に向ふ時、被告が法廷に出た樣にビク〳〵したりしなくてよい樣になるかも知れない大いに有望だ。達子は易に元氣づけられて大學を出して見たり傳習錄を出して見たり、何か自分の修養になる事がありはすまいかと漁つて見た。

達子は第一に意が誠でなくて自分でそれに苦しんで居るのだが、大學では意を誠にする工夫として格物致知を敎へて居る。平素は何の氣なしに讀み過して居るのだが、今自分が二元の心を持てあまして困つて見ると、大いに注意を引かれずには居ない。所が惜しい事には大學の傳文には此謂(レラフ)知之至(ト)といふ結文だけあつて達子が大いに研究して見たいと思ふ大切な部分は闕文になつて居るらしいのだ。そこで傳文を書いた曾子の考は知るによしない。ただ朱子や陽明の說によるより外、今は手がないのだ。欲(スル)誠(ニセント)其意(ヲ)者(ハ)先致(ス)其知(ヲ)致(スハ)知在(リ)格(スニ)物。朱子はこれを「知(シ)るを致すは物にいたるに在り」と讀んで、誠意の方法は

知つて知り拔くのだ。徹底する程知れば意は自ら誠になり得ると解き。陽明はこれを「知を致すは物をただすに在り」と讀んで知即ち持つて生れた良知——現代では良心と云ふ方がよく通用するが——をとゞけて行きさへすればよい。そして良知を致す方法はといふと物の不正な所をただして良知を掩ふ邪魔物を一つ一つ取りのけるに在るのだ。さうすれば意が誠になると解釋して、朱子の樣に知らうとして居る間には一生がたつて根氣がつきてしまふ、何でも知行合一でなくてはならぬと敎へて居る。そこに朱子學派と陽明學派との分岐點があるのだつた。達子は自分一人が不誠意に苦んで居るのではなくて、何千年もの昔から多くの聖賢さへ苦しんで研究したものだと知つて稍々肩の凝りがなほつた樣な感じがした。そこで其の二說のどちらがよいかは知らないが、達子はとにかく眞似をして見て意さへ誠になり得たらよいのだ。先づ陽明の說に從つて不正な部分から正して行かう。こんなに行き詰るにはどこかに缺陷があるに相違ないと思つて反省して見たが、どうも今迄通つて來た道のどこが惡かつたか、現在どこが不正なか判らない、自分ではよいと思へばこそ通つて來たのだから懺悔すべき箇所が見つからない。「でも良人を恨んだり憎んだり嫌つたりするそれが惡いぢやないか」と良心が云ふが、それが惡ければこそそれを去らうと工夫して居るので易々と去れるなら苦心する事は入らないのだ。どんなにかして愛する樣にならうとしたが今日までの所では無効で病を得たに止つたのだ。「そんなら寧ろ別れようか」と思うと良心はまた「それは女の道でないぞ」と云ふ。達子はそこで困るのだ。陽明先生が生きて居られるなら直接に尋ねて見たいが仕方がない。朱子の方の說によつて見ると、先づ達子は自分を知らない。良人を知らない。天命を知らない。この三つは是非知る必要があるらしい。達子も徹底する程それを知つて見たいと思ふが、併しそれは誰に聞く事も出來ない。聲もなく嗅もなき天上から直接に聞かねばならぬものらしい。達子は陽明の敎へに從つて靜坐をして見た。一度や二度では何の事もない。靜坐法をも種々にかへて工夫して見た。山田方谷先生は靜坐をよくなさつたもので、家の中の柱といふ柱が頭のあたる所だけ黑鬚付で盛れ上つて居たと、お父さんからよく聞かされて居たが、達子はほんの氣のむいた時眞似の樣なことをして見るだけだからさつぱりつまらないが、一日大佛樣になつて見た。眉間に白毫ありと思ひ、目を細く長く引き、息を靜かに吸ひ込

んだ。さうすると不思議に膝の下の蓮華の其の下に蟻の樣に小さな人間が見ねる。それは寛柔以敎和而不流を理想とする中國人とは違つて、『二ヶ月間には舍風を廓清します』といつて矢鱈と生徒を叱つた女學校の舍監と同じ島國、しかも嘗て易者が惡い方角だと云つた西南の方角の男だつた。何といふ哀れな淋しい樣だ。只管大佛樣の慈しみを渴仰して居る。決して恐ろしい心の持主ではない。寧ろ救を得なかつたら死ぬかも知れない程脆い淺い弱い人間だ。其の男の側に又氣狂の樣に走り回つて「ああ讀みたいのに書きたいのに、私は毎日キリ〳〵舞許りして死なねばならないのか。情けない。どうして此のまま死なれようぞ」と泣き叫んで居る女が居る。すると夕月がニコ〳〵して「書きたい人はお書なさい。神樣は書かせる爲に今日までの境遇を貴女にお與へになつたのでせう、此の機を逸せずお書きなさい。足る程お書きになれば又氣が變つて參ります。私なんかは下界を照すよりほか能がないのでこんなに毎夜々々照して居ります。なんとさうではございませぬか大佛樣」といつて、大佛の白毫をのぞいて笑つた。其の聲はお千代さんの聲の樣にもあり、小姉さんの聲かとも思はれた。

達子はガッと目を見開いて振ひ立つた。何といふ有り難いよい言葉だつたらう！「この仕事より外に自分には能がない」といふ言葉の味を達子は今日まで知らなかつた。釋尊の拈華微笑もそれだ。鳶飛戾天。魚躍于淵といふのもそれだつた。なんで鳶が淵に居て意が誠になり得ようぞ。達子が大聖人になつて愛し得ぬ人の爲に主婦の事務を取らうなんて柄にもない大役だつた。達子は書くより外には能事のない器だ。文即ち個性の完成と、理即ち造化の統一とはどちらを滅却するわけにも行かない。文理燦然として大宇宙は大大的オーゲストラを奏せなければならない筈だつた。神樣は今達子にペンといふ樂器を持たせて下すつたのだ。ああ有難いこの恩寵！私は精一杯奏でよう、タクトとの筈と一つになつて、無我無心になつて、ああ有難いこの恩寵！

さう思つて書きかけたのが此の作だ。今達子は自分の精一さが足りなくて、神意に添はない事はなかつたらうかと虞れつつ、これでペンを返上しようとして居る。

（大正十二年四月）

跋

孟子欲行道于諸侯。載質朝東暮西。說此而不用。則去之彼。乃自囂々然曰。天下有道則以道殉身。天下無道則以身殉道。未聞以道殉乎人者也。朱子註之曰。其以道從人妾婦耳。孟子又曰。女子嫁也毋命之。往送之門。戒曰行之女家。必敬必戒。無違夫子。以順爲正者妾婦之道也。居天下之廣居。立天下之正位。行天下之大道。得志與民由之。不得志獨行其道。富貴不能淫。貧賤不能移。此之謂大丈夫。予思至此。未曾不長大息也。何者其從天也易從人也難。殆有非同日之比焉者。夫天理直方大。使人也由其良能器之。人情不然。喜怒無方。及使人也求備不已也。故事一人既太難。況於舅姑嫂娣甥姪之多乎。妾婦之道何其難乎。雖才兼數人德合古聖健倍丈夫死以當之。然不得完其道而已矣。予頃日當其衝甚惑焉。而古人或如重丈夫之道輕妾婦之道者。婦也夙夜困勉周旋奔走。其所割烹非爲使適我嗜也。所洒掃非爲使清我視也。所彈奏非爲使樂我聽也。所粉黛非爲使悅我心也。至一顰一笑一舉手一投足非有私而爲之也。框我意矯我情汲々家人之說惟迎耳。與枌戲子之所事何所選乎。

扮戯子猶且得自遊於藝也。婦雖有學藝。挾之既悖其德也。雖有欲行。行之既離道也。滅我身與心。徹頭徹尾。然後室家始治昆弟怡焉。其間無介些不平雜微不滿。誠心誠意以甘犧牲不能也。天下何美如此矣。然而見世婦女幾人能爲之。或千之一二僥倖耳。其丈夫白載質朝東暮西以求我道可行之處。猶且不得也。況女在深窓。須媒介者而始配人。一嫁不可復東西也。其得之足甘死以事之。欲得君子而配焉。不亦至難哉。幸一朝得之者終身不知婦道之難安行自當道耳。不幸不得之者。終身勉行欲誠其意而不得。遂或不免夭折。或自棄爲使佞口給徒而已矣。豈可不悲哉。休道丈夫之道重妾婦之道輕。父暴厲母便佞。產兒不良必矣。不良兒滔々滿天下。則天下不平必矣。願婦亦與丈夫俱道立天下之正位行天下之大道相輔相成以平天下哉。

大正癸亥春　　著者識

大正十二年十月二十五日印刷
大正十二年十一月■五日發行

定價金貳圓

香川縣三豐郡大野原村大字大野原一八六三番地
著作兼發行者　中井隆

岡山市下田町三十六番地
印刷者　金田虎吉

岡山市東中山下四十番地
印刷所　中國民報社印刷部

岡山縣川上郡成羽町大字下原一〇二四番地
發行所　信原德太郎方

終